青少年に推奨できる ハンドボール

増田　静
（鹿児島県協会会長）

私の言葉

私は中学時代柔道（そのころは正科であった）をやったが、その後はスポーツに特に親しむことはなかった。戦後は青少年の健全な育成が強く叫ばれるようになったが、この問題にたいし私は人後に落ちない関心を持ち、情熱を傾けてきた。青少年保護育成条例を本県に制定させるため、8年間県議会で県当局と渡り合ってきた。青少年の健全な育成の一つとしてスポーツを奨励して、彼らの有りあまる精力をスポーツで発散させることがなによりと考えている。それで青少年のスポーツ振興にも協力することを心がけてきた。出身中学の後身である高校の野球後援会長を引き受けたのもその現われである。私は中学の2年か3年のとき、校庭でやっていた野球を見ていたら、ボールが飛んできてガーンと頭をやられたことがあった。そんなことから野球にはあまり興味を持っていない。

本県にハンドボール協会が発足したのは昭和23年、その翌年であったろうか前記高校の体育の古市先生から協会長になってほしいとの交渉を受けた。ハンドボールの名を聞いたのは、このときが初めてである。ハンドボールの名も知らなかった会長では心細く、また申しわけないと思ったが、かねて念願の青少年のスポーツ振興に少しでもお役に立ちたい一心で受諾した次第である。

それからまもなく鹿児島で九州大会（当時は福岡、熊本、鹿児島の三県で輪番制）が開催され、初めてハンドボールの試合を見た。そのとき最初に感じたのはチームの全員がいつでも動いている。しかも自分勝手でなく、互いは連係をとることを忘れてはならない。反則はきびしくとがめられる。全く青少年に奨めるに格好のスポーツと信じた。かつて早大に在学中、安部磯雄先生が「野球はチームワークが最も大事な競技である。9人が同じ心になって動かねば成果はあがらない。そこが野球のいいところだ」と言われたことを思い出した。ハンドボールこそは野球にもましてチームワークが最大に物をいうスポーツなのではないかと思った。試合の第2日はにわか雨でグラウンドは水たまりがいくつもできた。明善高校の女子選手たちは降雨を物ともせず、ドロンコになって善戦した姿はいまも忘れることができない。少々の雨降りで中止になるスポーツもあるのに…と感銘は深かった。また競技のための道具もわずかであるから、そのための費用も多額にのぼらぬ。「ハンドボールこそは青少年に大いに推奨すべきスポーツなり」と堅く信ずるようになった。

すべての競技がそうであるよう、よい指導者を得ることがハンドボール振興の基になる。わが国は比較的にハンドボールの歴史が浅い。よき指導者を得るかどうかが、その盛衰に大きく響く。高校にきて初めてやるようでは手遅れ。中学校で奨励することが大事である。中学校の試合を始めたのも、その観点からであった。「あそこも始めたなア」と喜んでいると、次の年には出場しない。やっぱり指導者の問題だなーと思った。ことに2、3年前に中学校の体育教材からハンドボールが除外されてからは、いちじ燃え上がった中学ハンドボールが下火になったのは事実。私は残念に思っている。国体の種目でもあることだし、少年のころからこの競技になじませることを望む私としては、中学校の体育教材に復活されることを希望してやまない。

ハンドボール・26号目次

〔表紙写真〕全日本総合選手権大会
愛知紡対大分東高戦、愛知紡古谷のシュート（大分合同新聞社提供）

第6回男子7人制世界選手権大会

日本は無条件出場決まる

1勝すれば12位以内に入賞

1967年1月・スウェーデン

第6回男子7人制ハンドボール世界選手権大会は42年1月12日から21日までスウェーデンで開かれる。本大会は16チームによって争われるが、このうちシード国は前回優勝のルーマニア、地元開催国スウェーデン、アジア代表の日本の計3チームで、いずれも無条件で出場。残る13チームを22チームの中から予選を経て決める。

▽シード国

ルーマニア、スウェーデン、日本

▽各大陸代表（各国で互いに1試合行なう＝リターンマッチ方式）

米国―カナダ

アルジェリア―アラブ連合

イスラエル―ユーゴスラビア

▽ヨーロッパ代表（各組ともリーグ戦を行ない、上位2チームが本大会に出場する）

（A組）チェコスロバキア、オーストリア、ノルウェー

（B組）西ドイツ、ベルギー、スイス、オランダ

（C組）ソ連、フィンランド、東ドイツ

（D組）デンマーク、ポーランド、アイスランド

（E組）ハンガリー、スペイン、フランス

「本大会試合方法＝16チーム」

4チームずつの4組に分けて予選リーグを行なう。この4組には前回大会の順位にともなって前回優勝のルーマニアがA組、2位スウェーデンがB組、3位チェコスロバキアがC組、4位西ドイツがD組となり、さらに5位ソ連、6位ユーゴスラビア、7位デンマーク、8位ハンガリーの4チームは抽選で各組にはいる。これら8チーム以外の8チームはそれぞれ抽選することになっている。

予選リーグの結果、各組とも上位2チームが1―8位決定トーナメント戦、各組の3位チームで9―12位決定リーグを行なう。各組の4位チームの試合はない。

決勝トーナメント8チームの割り当ては、各組の1位チームを抽選で1、4、5、8へ入れる。2位チームを2、3、6、7に入れる。ただし予選リーグの同じ組のチームが準決勝で顔が合わないように変更することがある。

開催地次のとおり。

（A）南グループ（ルント、ヘルシングボルグ、マルメ）

（B）西グループ（ヨテボリ、ジェンケーピン）

（C）ストックホルム・グループ（オエレブロ、リンケーピン、ストックホルム）

（D）北グループ（キルナ、マルムベーゲン、ボデン）

▷決勝トーナメント

決勝……
準決勝……　イ　ロ
準々決勝……　A　B　C　D
1　2　3　4　5　6　7　8

▽3―4位決定戦

イの敗者　ロの敗者

▽5―6位決定戦

い　ろ
Dの敗者　Cの敗者　Bの敗者　Aの敗者

▽7―8位決定戦

いの敗者　ろの敗者

41年度国際試合案

日本ハンドボール協会はこのほど昭和41年度の国際試合日程案を内定した。

▽チェコスロバキア・チーム招待（交渉中）41年4月の約3週間。男女とも各10試合。

▽ソ連・ルーマニア遠征（交渉中）41年5月から6月にかけて3週間。男子ナショナル・チームを派遣（18人）。

▽中国チーム招待　41年9月から10月にかけて3週間。男子チーム（18人）。

▽第6回男子7人制世界選手権大会　日本ナショナル・チーム（役員4、選手16）が参加。場所はスウェーデン。

明年度の国際試合について

境井秀三
(渉外担当常務理事)

解説

1966年度の最大の国際行事はスウェーデンで1667年1月に開催される第6回男子7人制ハンドボール世界選手権大会になると思う。日本は1961年西ドイツでの第4回男子7人制世界選手権大会に初参加し、本大会第1次リーグでその年の優勝チーム、ルーマニア、それに2位となったチェコスロバキアと同じグループで争い、両国に敗れて順位外となった。続いて1964年チェコスロバキアでの第5回大会では、本大会第1次リーグで伝統的7人制競技の実施国であるノルウェーを破ったものの、やはり優勝したルーマニア、5位となったソ連に敗れて順位決定戦に進出できなかった。西ドイツの大会のときも、またチェコスロバキア大会のときもヨーロッパ諸国および国際連盟は、日本に対してはアジアのパイオニア(開拓者)として非常に温かい態度で接してくれた。ヨーロッパの報道も「日本の成長を期待する」といったきわめて好意的な報道が多かった。

しかし次の1967年のスウェーデンの大会からは同じような状況を期待しない方がよいと思われる。というのは、まず第一に前回まではヨーロッパ以外の参加国は日本だけであったが、次回大会には米国、カナダ、アルジェリア、アラブ連合、イスラエルなどヨーロッパ以外の国も参加することになったからである。次には昨年の総会でナショナル・チームのじゅうぶんな準備のためという理由で、世界選手権大会の開催周期を2年から3年に変わった。これでもわかるようにヨーロッパ諸国はまじめな態度でも世界選手権大会にのぞもうとしている。したがって日本にはイスラエルというアジアの参加国があるにもかかわらず地理的悪条件とノルウェーに勝ったという前回大会の実績で予選をやらず、直接本大会に出場することが認められた。(予選なしで本大会参加の認められるのは前回大会優勝国と開催国のみ)。もし本大会のリーグ戦で良い成績をあげることができないで順位決定戦へも進めないようなことだと、日本に与えられた国際的な信頼と期待をはなはだしく裏切ることになるのではないか。

このような立ち場にある日本が1966年度の国際事業計画と選手強化計画を組むわけである。当然男子世界選手権大会を目標にした計画になるのは当然。日本協会あるいは日本代表に選ばれた選手だけが目の色を変えて世界選手権上位入賞のため逆立ちしても決して目的が達成されるものではない。そのためには単なるその場その場のデッチ上げの計画では日本のハンドボール関係者の協力も得られるものではないと深く反省している。

このような意味でここにまだ交渉中のものもあり、また執筆時点ではまだ理事会、評議員会の議も経てないにかかわらず、あえて現在手の内にある1966年度国際事業計画案を紹介したわけである。4月に予定しているチェコスロバキア選手団の交渉が実現すれば、その機会に本誌でもその論文を紹介したチェコスロバキア・ナショナルBチーム監督のケーニッヒ氏をコーチとして招待したい。チェコスロバキア選手団の日本滞在の前後に各1週間くらい日本代表選手候補者団の合宿を見てもらうよう計画をしている。またソ連遠征の交渉がまとまれば、1960年にルーマニアを日本へ招待したときの約束—ルーマニアがモスクワーブカレスト間の旅費を負担して日本選手団を招待するという取り決めを利用して、世界のチャンピオン国まで武者修行に足を伸ばすことを考えている。この招待と遠征により、基礎的な技術と経験を固めたい。そして残る半年でじゅうぶんな仕上げを行なうようレールを敷きたい。1967年1月の大会では決して前回、前々回の結果に終わることはないと信じている。

女子遠征チームの日程

日本協会は今秋の第3回女子7人制ハンド世界選手権大会に出場する日本チームの日程が決まった。まずチェコスロバキアで2試合行なう。チェコスロバキアに勝てば西ドイツでの準々決勝(ベスト8)に進出する。もしチェコスロバキアに負けた場合、世界選手権を観戦しながら西ドイツ国内を転戦する。このあとフランスに立ち寄り、ステラ・チームらと対戦する。遠征日数は42日間。

日付	予定
10.20(水)	22.30 羽田発
21(木)	15.30 プラハ着
24(日)	世界選手権大会 日本—チェコスロバキア第1戦
26(火)	日本—チェコスロバキア第2戦
27(水)↓11. 5(金)	親善試合(チェコ)
6(土)	プラハ発西ドイツへ
7(日)	世界選手権大会(西ベルリン)
9(火)	〃 (ハノーバー)
11(木)	〃 (ボッチャム)
13(土)	〃 (ドルトムント)
14(日)↓20(土)	西ドイツで親善試合
21(日)	西ドイツからパリへ
22(月)↓30(火)	フランス滞在。ボルドー、ナント、ナンシー各選抜チーム、ステラチームと対戦。
12. 1(水)	羽田着

—◇—◇—

第3回女子7人制世界選手権大会の日本代表メンバーは21ページにあります。

第17回全日本総合選手権大会・大分市

第17回全日本ハンドボール総合選手権大会は８月22日から26日まで大分市・鶴崎高校グラウンドで行なわれた。男子は予想どおり全立大（協会推薦・東京）、芝浦工大（協会推薦・東京）、大阪イーグルス（近畿代表・大阪）、大崎電気（協会推薦・埼玉）がベスト４に勝ち残った。決勝は大崎電気—芝浦工大の間で争われた結果、大崎電気が23—11で勝ち、２連勝（通算３度目の優勝）した。女子は予選トーナメントを勝ち抜いた大崎電気（埼玉）、田村紡（三重）、愛知紡（愛知）、大洋デパート（熊本）の４チームで決勝リーグ戦を行ない、２勝同士の大崎電気—大洋デパートの間で優勝を争った。この結果、大洋デパートは西村の健闘で大崎電気の２連勝をはばみ、一昨年に次いで２度目の優勝をとげた。なおこの大会第１日に高松宮ご夫妻がご観戦になった。〔写真は開会式でごあいさつされる高松宮さま＝大分合同新聞社提供〕

大崎電気（男子）２連勝

女子は大洋デパートが２度目

男子

▽１回戦

関大（大阪）26（12—8　14—5）13 常盤工業（岐阜）

〔評〕グラウンドが軟弱なためドリブル、フェイントに苦しんだが、パスワークにまさる関大が押し切った。常盤は個々の力はかなりあるが、チームプレーに徹し切れなかったのが敗因。（岡村主審）

中大（東京）21（12—8　9—12）20 熊本教員（熊本）

〔評〕若さの中大、ベテランぞろいの熊本。熊本は前半うまいパスワークで中大の速攻を封じたが、後半ポストにたよりすぎ、走りを忘れた。中大は小崎のたくみなフェイントからのシュートが決まり、しかも全員がよく走ってタイムアップ寸前逆転勝ちした。（小西主審）

日体大（東京）21（11—5　10—8）13 宗形製作（大阪）

〔評〕宗形は凡ミスを繰り返して自滅した。日体大は前半10分までに５—１とリードを奪い、後半も走りまくって宗形を押えた。しかし日体大のプレーはあまりまとまりがなかった。（岡村主審）

日体大ク（東京）32（16—9　16—3）12 広島商大（広島）

〔評〕日体大は結城、中釜、神谷葭らを中心によくまとまっており、若さで広島商大を破った。広島商大はリードオフ・マンがいないため、攻撃は非常に単調だった。日体大クのワンサイド。（小西主審）

奈良ク（奈良）34（20—4　14—14）18 大分教員（大分）

〔評〕技術的には全く差がなかった。前半は１点を争う試合となったが、奈良クは後半西村、中村の好打で勝った。大分は精神面での訓練が必要と思う。（井上主審）

明大（東京）16（10—4　6—8）12 日本鋼管（神奈川）

〔評〕前半互いによく走って好ゲームを展開。日鋼はフェイントプレーで前半２点リードしたが、明大は後半池田を中心に連続得点して日鋼を押えた。若さと体力の勝利。日鋼は松村、中村がよくがんばった。（財前主審）

芝浦工大（東京）26（15—7　11—7）14 本田技研（三重）

〔評〕本田技研は大下にたよりすぎたため単調な攻めだったので、芝浦工大の厚いディフェンスを破れなかった。芝浦工大は前半調子が出なかったが、後半よく走り速攻を展開して勝った。（井上主審）

慶大（東京）15（9—7　6—7）14 住友化学菊本（愛媛）

〔評〕前半互角に戦った。後半慶大は若さを発揮して１点差で逃げ込んだ。住友の加藤の好プレーは光った。（財前主審）

千代田印刷機（東京）27（18—7　9—8）15 茨城大

〔評〕前半シーソーゲームを展開した。後半中ごろから茨城大のミスが目だち、動きもシュートに結びつかなかった。千代田は速攻をみせて大勝した。しかし青木のシュートにたよりすぎ、セットの動きはよくなかった。（佐野主審）

同志社大（京都）26（14—10　12—10）20 順天堂ク（千葉）

〔評〕同志社大は前半のリードを守り通して勝った。ただプレーが荒く、退場者を出した。順天堂クは高野、鈴木、倉本ががんばった。（大塚主審）

京大（京都）24（12—13　12—8）21 岡野バルブ（福岡）

〔評〕前半10分で10—２と京大が大差をつけて優位に立った。岡野は矢島を中心にして反撃、前半４点差まで追いついた。後半開始直後に京大は立て続けにポイントをあげ、食い下がる岡野を振り切った。岡野の矢島、友広、山田、松山のプレーはよかった。（佐野主審）

教大（東京）22（14—7　8—10）17 徳山ク（山口）

〔評〕実力伯仲してシーソー・ゲームを展開。後半10分から15分までに教大は連続５点をあげて優勢にゲームを進めた。徳山は安沢が５点、中所が４点をあげたのはりっぱ（大塚主審）

東北学院大（宮城）33（19−6、14−14）20 大分ク（大分）

〔評〕前半は接戦。後半東北学院大は大分のパスミスに乗じて速攻の連続で大差をつけた。大分は個人プレーが多かった。クラブチームとしてはやむを得ないが、6人攻撃をしなかったのが敗因。東北学院大はチームプレーに徹していた。（今村主審）

▽2回戦

全立大（東京）21（15−8、6−7）15 関大

〔評〕全立大は安達、中根、江名が勤務のつごうで出場せず、苦しい試合を続けた。しかし木野、北村が健闘した。関大は平岩、宮永らを中心に前半善戦したが、後半走りが止まって敗れた。（井上主審）

中大 23（10−12、13−6）18 日体大

〔評〕中大は清元の好リードで両サイドがよく走り、GKのうまいボール出しで着実に加点した。日体大は立ち上がり再三ラインクロスで得点機をつぶしていた。後半日体大は中大の気のゆるみをついて逆襲したが、前半の失点が大きすぎた。中大は学生らしくもっと走ってほしかった。（小西主審）

日体大ク 40（16−10、24−7）17 奈良ク

〔評〕奈良は最後までよくがんばったが、及ばなかった。日体大クは藤原のリードでよくまとまり、スピーディーなプレーを展開した。とくにGK井上のファインプレーはすばらしかった。この試合で日体大クは全員が得点した。これは協会創立いらい初めての記録。（柳井主審）

得	日体		奈良	得
1	井上	GK	平井	0
1	佐藤	GK	保月	0
6	藤原	FP	木村	0
3	三友	FP	三浦	0
8	山口	FP	中村	7
7	結城	FP	西畑	0
2	神谷治	FP	木矢	1
1	小林	FP	市田	0
2	中釜	FP	山谷	4
7	神谷葭	FP	西村	4
2	高橋	FP	内野	1
40				17

芝浦工大 29（15−10、14−5）15 明大

〔評〕立ち上がり互いにもたついていたが、芝浦は徐々にピッチをあげて勝った。前半で試合が決まったといっていい。明大は福本が9点をあげてがんばったが、実力差はどうすることもできなかった。（小西主審）

大阪イーグルス（大阪）19（14−6、5−8）14 慶大

〔評〕慶大は前半早い走り、うまいパスワークをみせた。しかもディフェンスが堅く、大阪は苦戦した。後半になると大阪は調子を取り戻して速攻の連続で17分タイに追いついた。このあとは大阪のペースとなった。慶大の小椋、小林のプレーは光った。（大塚主審）

同志社大 21（12−10、9−5）15 千代田印刷機

〔評〕同大は前半千代田のパスミスをうまくついてリードした。同大は終始走っていたが、千代田は練習不足によるディフェンスの甘さが目だった。千代田は後半追い上げていちじは2点差まで詰めたが、スタミナの不足もあって敗れた。（佐野主審）

京大 18（6−6、12−10）16 教大

〔評〕京大は前半15分までに教大のドリブルミスに乗じて8−4とリードして優位に立った。後半教大は北井を中心にして反撃。いちどは同点としたが、前半と同じミスを繰り返して自滅した。（主審　　）

大崎電気 27（13−1、14−2）3 東北学院大

〔評〕実力差。東北学院大は最後までよくやった。鈴木が2点、高橋が1点をあげた。大崎はGK福本を除く全員がむらなく得点した。（財前主審）

同大、延長で敗れる

▽準々決勝

全立大 28（19−6、9−5）11 中大

「レフェリー」中西（日体大出）

〔評〕中大の田中監督は試合前に「安達、中根、江名の3人がいないので、木野を徹底的にマークすればチャンスがある」といっていたが、木野をついにつぶせず敗れた。前半は互いに7MTと相手のミスからの得点で凡戦。後半全立大は木野を柱にしてよく走り、ワンサイドとなってしまった。中大ディフェンスは全立大の鋭い攻撃に浮き足立ち、点差は予想以上に大きくなってしまった。（鴛尾）

得	中大		全立大	得
0	上原	GK	尾形	0
0	竹下	GK	北田	0
1	清元	FP	伊東	3
1	田尻	FP	藤城	5
0	小崎	FP	林	2
2	浜口	FP	木野	8
2	熊本	FP	北村	5
0	百武	FP	東	1
5	加藤	FP	野田	4
0	渡辺	FP		
0	広田	FP		
11				28

芝浦工大 31（16−7、15−6）13 日体大ク

「レフェリー」岡村（教大出）

得	日体大ク		芝浦	得
0	高橋	GK	渡辺	0
0	佐藤	GK	山村	0
3	藤原	FP	青山	1
2	三友	FP	吉金	5
3	山口	FP	近藤	9
2	結城	FP	近森	5
0	神谷治	FP	岩崎	2
1	小林	FP	関根	3
0	中釜	FP	山田	5
1	神谷葭	FP	竹内	1
1	井上	FP	小林	0
13				31

〔評〕速攻の応酬でスタートしたが、芝浦は近藤の好リードで日体大クのディフェンスを簡単にくずして一方的に勝った。日体大クは芝浦の1−5ディフェンスに手こずり、どうすることもできなかった。スピードの差で勝負がついたといってもいい。（鴛尾）

大阪イーグルス 28（9−8、11−12、2−0、6−3）23 同志社大

「レフェリー」佐野（教大出）

得	大阪		同大	得
0	島崎	GK	林谷	0
0	光島	GK	和保	0
0	松尾	FP	松浦	4
0	山本	FP	川井	2
1	丸岡	FP	磯部	0
3	東	FP	林	6
0	藤井	FP	飯田	6
8	井上	FP	佐藤	3
11	青木	FP	稲葉	2
2	北岡	FP	守本	0
3	加藤	FP	藁品	0
28				23

〔評〕同大は現役なのに〃走り〃がなく、これが大きな敗因となった。学生なら学生らしく、もっときびきびしたプレーがほしかった。相手はなにしろ日体大出のベテランぞろい。走り、体力の点で同大が日体大クを上回っても決して不思議ではない。それがなかったのは残念。もう少し走っていたら勝っていたゲーム。後半タイムアップ寸前にやっと20−20と追いついて延長戦。

延長前半は4分に青木が左45度から決めて1−0、この直後に同大に反則（退場）があって井上が7MTを決めて2−0。同後半は日体大クの青木、加藤、井上が速攻で〃あっ〃という間に6点をあげて勝負をつけた。左45度、あざやかなリターンパス、倒れ込みなど文字どおりベテランぶりを発揮した。ハンドボールは速攻、早い

動きがなければ勝てないことを、この延長戦ではっきり示してくれた。（鴛尾）

大崎、全員得点

大崎電気 29（13—3／16—7）10 京大

「レフェリー」柳井（日体大出）

京大		得	大崎		得
GK	今安	0	GK	福本	1
GK	伊賀	0	FP	田口	2
FP	辻野	2	FP	小谷内	1
FP	竹口	1	FP	金田	8
FP	安達	0	FP	宮原藤	2
FP	川口	0	FP	竹野	2
FP	山口	2	FP	井上	8
FP	市橋	1	FP	坂野	1
FP	川島	3	FP	西村	1
FP	山部	0	FP	北村	3
FP	谷口	1			
		10			29

〔評〕実力どおりの試合といっていいだろう。この試合で目についたことは大崎のエース竹野が若い選手にボールを回して打たせていたこと、ベテラン宮原藤、田口が若い選手顔負けの〝走り〟をみせたこと、井上、金田がうまくなったことだ。京大にいえることは、スピード、ロングシュートを養成することだ。これをやらない限り全日本のトップレベルに到達しない。（鴛尾）

全立大敗れる

▽準決勝

芝浦工大 15（8—5／7—6）11 全立大

「レフェリー」佐野（教大出）

芝浦		得	全立大		得
GK	渡辺	0	GK	尾形	0
GK	山村	0	GK	北田	0
FP	青山	1	FP	伊東	2
FP	吉金	1	FP	藤城	0
FP	近藤	2	FP	林	1
FP	近森	4	FP	木野	3
FP	岩崎	0	FP	北村	2
FP	関根	3	FP	東	0
FP	山田	4	FP	野田	3
FP	竹内	0			
FP	小林	0			

11（3）7MT（1）15

▽反則退場者なし

〔評〕全立大はOBの安達、中根、江名の欠場が響いて戦力は半減した。木野を中心にがんばったが、芝浦工大のスピードに圧倒されてしまった。全立大といっても現役チーム、ちょうど関東学生リーグと同じ。春のリーグ戦は立大、夏のインカレは芝浦工大、つまりことし3度目の対戦となったわけである。

全立大のすべり出しはすこぶるよかった。前半1分芝浦は近藤がドリブルで突っ込み、右45度からゲットしたが、このあと全立大は3分、4分に木野が7MTを2本決め、5分野田がカット—速攻で3点目、6分木野—北村のコンビで北村がポストプレーで決めて4—1とリードした。芝浦は10分まで動きが悪く、ラフプレーが目だった。9分近森のジャンプシュート、14分に近森が7MTを決めて4—3と1点差にしてから芝浦は徐々にペースを取り戻した。15分全立大のボールをカットした近森が山田にパスして速攻にはいり、4—4と追いついた。こうなると芝浦のスピードがものをいう。関根、山田の好打で21分30秒には7—4とリードした。全立大は木野の7MTで7—5としたが、前半終了まぎわに関根が右サイドから飛び込んで8—5。

後半30秒に全立大は木野の見事なバックパスを野田が決めて8—6。芝浦も1分に小林がゴールポスト当たってはね返ったボールをプッシュして9—6。このあとは互いに守備を固めたが、芝浦は16分30秒から20分30秒までに近藤、近森、山田の3人で5点をあげて15—10と5点リードした。ここで勝負がついた。

全立大は攻撃範囲がせまく、しかもポストにたよりすぎた。それに速攻の呼吸が合わず、コンビがくずれた。そこを芝浦のスピードに攻めまくられた。芝浦は本領を発揮した一番といっていい。（鴛尾）

大阪イーグルス善戦

大崎電気 21（10—4／11—7）11 大阪イーグルス

「レフェリー」岡村（教大出）

大阪		得	大崎		得
GK	島崎	0	GK	福本	0
FP	松尾	0	FP	田口	0
FP	山本	0	FP	小谷内	3
FP	丸岡	0	FP	北村	2
FP	東	5	FP	金田	4
FP	藤井	0	FP	宮原藤	0
FP	井上	3	FP	竹野	2
FP	青木	3	FP	井上	10
FP	北岡	0	FP	坂野	0
FP	加藤	0	FP	西村	0
			FP	餅原	0

21（1）7MT（2）11

▽反則退場者 田口、東

〔評〕大崎は田口、宮原藤の両ベテランが好リード、このため若手がよく走った。とくに井上は前半1分きれいなポストプレーを決めたのをはじめ、GK福本のうまいボール出しして井上がノーマークで攻め、ひとりで10点を入れた。これが大きな勝因。イーグルスは前半13分まで東、井上、青木のトリオで善戦して5—4と1点でついていったが、そのあとは大崎のスピードに押えられた。後半東、井上が好プレーをみせたが及ばなかった。（鴛尾）

大崎電気楽勝

▽男子決勝

大崎電気 23（11—5／12—6）11 芝浦工大

「レフェリー」佐野（教大出）

芝浦		得	大崎		得
GK	渡辺	0	GK	福本	0
GK	山村	0	FP	田口	1
FP	小林	1	FP	小谷内	0
FP	千ヶ崎	0	FP	北村	0
FP	吉金	1	FP	金田	4
FP	近藤	4	FP	宮原藤	1
FP	近森	2	FP	竹野	6
FP	岩崎	0	FP	井上	9
FP	関根	0	FP	餅原	2
FP	山田	0	FP	西村	0
FP	竹内	3			

23（3）7MT（5）11

▽反則退場者 関根、竹内、北村、餅原

〔評〕全く予想外の凡戦だった。それは芝浦工大のほとんどの選手が前日から激しい下痢症状を起こし、試合開始直前にコートに姿を現わすほど。選手の顔色は悪く、気の毒なくらい。したがって芝浦工大は呼吸が合わず、得意の速攻が全然出なかった。これは当然のことだろう。勝負はやる前から決まっていた。

大崎はエース竹野が意欲的に動き、若い選手を引っ張っていった。田口、宮原藤も若い選手が顔負けするほどファイトを持って走り回った。前半1分竹野が右45度から得意のワンバウンド・シュートをたたきつけて先取点をあげた。ペースは大崎のもの。14分までに7—0と引き離した。芝浦工大は15分に大崎GKが止めてはね返ってきたボールを吉金がすかさずプッシュして待望の1点を入れ7—1。このあと芝浦工大は竹内が2点、近森が7MTを2本決めたが、前半は11—5と6点差。

後半大崎は金田、井上、餅原が速攻を決めた。芝浦工大も近藤、竹内、小林らの活躍で追いすがったが、体力が続かなかった。前日までの芝浦工大の試合ぶりから見て優勝のチャンスはじゅうぶんあったが、突然の事故で思わぬ大敗を喫したのは気の毒。（鴛尾）

☆　☆

〔おわび〕本誌25号（8月発行）の4ページ、全国高校選手権男子の清水市商—函館東の試合写真は、朝日新聞社の提供でした。謹んでおわびいたします。

大崎の男女優勝ならず

女子

▽予選トーナメント1回戦

（A組）

清水女高（静岡） 8（5－5, 3－2）7 臼杵高（大分）

〔評〕 清水は米山が6点、大石が2点、臼杵は寺塚が6点、古賀が1点。実力、技倆ともよく似たチーム。清水は後半臼杵の寺塚をうまく押えて辛勝。（岡田主審）

（B組）

大分府内ライオンズ・ク（大分） 9（2－1, 7－3）4 大垣南高（岐阜）

〔評〕 両チームとも前半堅くなりすぎて凡戦。後半この堅さがとれ、大分はスピーディなパスワークと走力を生かした速い攻撃で大垣を押えた。大垣はプレーが荒かった。（小袋主審）

田村紡（三重） 14（10－3, 4－0）3 徳山高（山口）

〔評〕 田村紡は見事なパスワークとスピード豊かな攻撃で徳山高のディフェンスを破った。しかし田村紡は後半疲れが出て攻撃が乱れた。徳山は前半の失点にも負けず、全員がよくがんばった。（岡田主審）

（C組）

愛知紡（愛知） 10（4－6, 6－2）8 日体大（東京）

〔評〕 日体大は前半ミドル・シュートを決めてリード、愛知紡はコンビが合わず苦戦した。後半になると日体大はミスが多く、愛知紡の速攻を許した。愛知紡は古谷のプレーがよかった。（柳井主審）

大分東高（大分） 15（7－6, 8－4）10 揖斐川電気（岐阜）

〔評〕 前半シーソー・ゲーム。後半揖斐川は疲れが出てスピードが鈍くなった。大分東高は井上、藤野を中心によく攻めた。揖斐川は赤塚、久保田がよくやった。（中西主審）

（D組）

東京重機（神奈川） 26（11－1, 15－0）1 大分商高（大分）

〔評〕 実力の差。重機は斎藤がひとりで16点をあげ、ワンサイドゲーム。大分は基礎練習がじゅうぶんでない。秦が1点を入れてシャットアウトをまぬかれた。（柳井主審）

▽同2回戦

（A組）

大崎電気（埼玉） 22（12－0, 10－0）0 清水女高

〔評〕 実力があまりにも違いすぎた。40分ゲームに大崎は22点をあげて楽勝。大崎のディフェンスは堅く、清水がいくら突進してもはね返された。清水は米山に打たせたが、これが決まらず大崎の速攻を浴びた。清水はよくやった。（岡田主審）

（B組）

田村紡 18（10－1, 8－1）2 大分府内ライオンズ・ク

〔評〕 大分は姫野が2点をあげてがんばったが、田村のスピードに手が出なかった。大分は最後まで健闘、観象からさかんな拍手を浴びた。（小袋主審）

（C組）

愛知紡 17（8－2, 9－2）4 大分東高

〔評〕 点が開いたけれど、内容はきびきびした好プレーだった。愛知は古谷、関口、高橋らの速攻で勝負を決めた。大分は帰陣を早くし、セットの場合には幅広い攻撃をマスターしてほしい。それにフォローをよくすることだ。（今村主審）

大洋デパート（熊本） 13（6－4, 7－7）11 東京重機

〔評〕 東京重機の善戦が光った。斎藤、福岡、能登ががんばり、13－7から一気に追い上げて13－11と2点差まで詰めた。大洋は西村の好リードと全員がよく走り、2点差で逃げ込んだ。東京重機はすばらしい成長をみせた。（岡村主審）

〔写真は愛知紡対大分東高戦、大分東高のシュート〕

田村紡善戦

▽決勝リーグ第1日

大崎電気 9（5－2／4－3）5 田村紡

「レフェリー」今村（日体大出）

大崎		得
GK	古谷	0
	川崎	0
FP	笠原	0
	早川	1
	宇井	0
	鈴木	5
	黒川	1
	永井	2
	伊藤	0
	加藤	0
		9

田村		得
GK	渡辺美	0
	坂上	0
FP	種村	1
	川口	0
	水谷	0
	小林	1
	内藤	0
	渡辺好	2
	清水	1
	渡辺信	0
	信藤	0
		5

▽反則退場者なし

〔評〕さすがは大崎である。貫録といおうか、豊富な試合経験がものいったといおうか、とにかく大崎の完勝である。心配された大崎の走り、これが大きな勝因となった。ディフェンスもよかった。東京本社から埼玉工場のコートまで片道1時間半の時間を使って連日猛練習に励み、〝打倒田村紡〟一本にしぼってやってきた甲斐があったというもの。前半終了まぎはにちょっとディフェンスの詰めが甘くなったが、後半これがなくなり、スピード豊かな攻撃を展開した。攻めてよし、守ってよしというゲーム。鈴木のカットイン、宇井の好リード、黒川の好守備。故障者が多かったが、これを気力で見事カバーしたのは賞していい。

　この大崎の好プレーに対して田村紡の攻撃は実に単調そのもの。これでは大崎の厚いディフェンスは破れない。したがってポストプレーでなんとか反撃機をつかもうとしたが、大崎の早いつぶしに合ってどうにもならなかった。宇津野監督は「ロングを打つチャンスが全くなかった」というほど、大崎の詰めがよかったわけ。

　昨年12月の全日本総合室内選手大会で優勝したときのような〝走り〟、〝スピード〟は全くなかった。2月の全日本実業団選手権大会のときもそうだった。試合内容がだんだん悪くなってきたように思う。大崎は優勝への足がかりをつくった。（鴛尾）

愛知紡敗れる

大洋デパート 8（5－3／3－2）5 愛知紡

「レフェリー」小袋（日体大出）

大洋		得
GK	山口	0
	小原	0
FP	久松	2
	西村	2
	高山	0
	中村	1
	枝尾	0
	新保	2
	射場	1
	稲田	0
	連隈	0
		8

愛知		得
GK	篠崎	0
	原田	0
FP	鏡	0
	韮崎	1
	伊藤	0
	古谷	4
	関口	0
	高橋	0
	近藤	0
	村上	0
	小野	0
		5

▽又則退場者なし

〔評〕互いに手の中を知り尽くしている間柄。前半大洋はうまいセットプレーで愛知の防御陣を破ってリードした。3分左サイドからのパスを45度の地点で飛び込んで先取点をあげれば、愛知も7MTで反撃した。5分大洋は左サイドでのうまいセットプレーから得点、その後11分は7MT、14分新保のうまいシュートで4－1とリードを奪った。愛知も長身韮崎がミドルシュートを決めて4－2、18分大洋は7MTからのミスボールをゲットして5－2。愛知も古谷のタイミングのいいランニングシュートで前半5－3。

　後半の愛知は必死に追いかけ、13分古谷が大洋のパスミスに乗じて5－5とタイスコア。試合はおもしろくなった。15分大洋は西村がフリースローから得意のフリーシュートを決めて再び6－5とリード。17分に7MT、19分には中村のカットインシュートを決めて食い下がる愛知を突き放した。

　両チームとも走力を生かし、きびきびした好試合を展開したが、西村の好リードとセットプレーのうまさが古谷1人の愛知を制した。（佐野主審）

大崎快勝

▽女子決勝リーグ第2日

大崎電気 13（9－3／4－3）6 愛知紡

「レフェリー」小袋（日体大出）

大崎		得
GK	古谷	0
	川崎	0
FP	笠原	1
	早川	2
	宇井	2
	鈴木	2
	黒川	2
	永井	3
	伊藤	0
	加藤	1

愛知		得
GK	篠崎	0
	原田	0
FP	鏡	0
	韮塚	0
	伊藤	2
	古谷	3
	関口	1
	高橋	0
	近藤	0
	村上	0
	小野	0

13（3）7MT（1）6

▽反則退場者なし

〔評〕大崎電気の勝利は順当。ダブル・スコアと予想以上に差がついたのは意外だった。大崎電気は鈴木を前面に立てて1－5ディフェンス、ときには笠原を参加させて2－4ディフェンスと愛知紡の攻撃を見極めて変型させていたのはよかった。ボールをキープすると得意の速攻。愛知紡ゴール前で激しくゆさぶってチャンスをつくり、少しでもすきを見つけると強引に割って出た。前半4分から7分までにみせた大崎電気の攻撃は実にあざやかだった。まず4分には宇井がフェイントをかけて突っ込み、先取点をあげた。愛知紡もすぐ追いかけ、関口が中央からのワンバウンド・シュートして1－1。5分に鈴木が愛知ボールをカット、速攻をかけて黒川がゲット。6分には永井が7MT、6分30秒鈴木－早川と渡って早川がジャンプシュート、7分また永井が7MTを決めて5－1と4点差。愛知ディフェンスは非常に荒く、与えなくてもいい7MT2本を取られてしまった。この2点は最後まで響いた。

　大崎電気のこの集中攻撃に対して愛知紡はボールの回しが悪く、

2度目の優勝をとげた大洋デパートチーム

無敗同士の大崎電気・大洋デパートの試合では、タイムアップ5秒前、西村の劇的な決勝ゴール。ついに大崎電気の2連勝をはばみ，一昨年に次いで2度目の優勝。

鋭さがなくなった。11分ルーズボールを高橋がキープし、古谷に渡ってノーマークシュート。これで5—2としたが、大崎電気も13分に宇井—鈴木と回り、鈴木の見事なポストプレーで6—2。完全に大崎電気のペース。愛知紡の攻撃は相変わらず単調、走りがないうえに中央攻撃の繰り返しでサイド攻撃がなかった。ロングもかげをひそめ、力不足の感があった。14分30秒伊藤がきれいなジャンプシュートして6—3と迫まったのが精いっぱい。大崎電気は18分から19分50秒までに宇井の7MT、加藤—鈴木のリターンパスを鈴木がゲット、さらに黒川が決めて前半は9—3。勝負はこれで決まってしまった。

後半は互いに疲れが出たのか凡戦。大崎電気は前半の大差で気がゆるんだのか、開始直後に早川が中央からジャンプシュートを決めてから12分までノーゴール。このすきをつけなかった愛知紡——。全盛期ならこの間に差を縮めていたことだろう。5分、5分30秒に7MTが2本あったが、1本決めただけ。15分30秒にも7MTがあったが、GK川崎の好守にはばまれた。大崎電気は12分に永井が7MT、15分に笠原のゲット、17分には新人加藤がランニング・シュートして13—4と一方的な試合。このあと愛知紡は2点を返したにとどまった。

ラフ・プレーのため7MTが多かった。大崎電気は4本とも決めたのに対し、愛知紡は3本のうち1本しか決まらなかった。7MTによる得点がいかに試合を左右するかがよくわかる。また後半大崎電気の攻撃がちょっと雑になったのは感心できない。愛知紡は古谷1人では気の毒だ。サウスポー伊藤のプレーは将来が楽しみ。下半身を鍛えたら愛知紡のエースになるのではないか。大崎電気は前半18分から若手GKの川崎を起用したが、7MT2本をとめたプレーはよかった。なお愛知紡の小林は盲腸炎のため欠場した。（鷲尾）

大洋逃げ切る

大洋デパート 7（3—3／4—3）6 田村紡

「レフェリー」小西（日体大出）

〔評〕 1点を争う好ゲーム。後半14分からみせた田村紡の猛反撃で6—6と四たびタイスコアとなったが、大洋はタイムアップ寸前に西村—久連松の好プレーでやっと逃げ込んだ。大洋はあぶない橋を渡り、ベンチをひやひやさせた。

大洋		得	田村	得
GK	山口	0	渡辺美	0
GK	小原	0	坂上	0
FP	久連松	5	種村	0
FP	西村	0	川口	0
FP	高山	0	水谷	1
FP	中村	0	小林	3
FP	枝尾	0	内藤	1
FP	新保	1	渡辺好	0
FP	射場	1	清水	1
FP	稲田	0	渡辺信	0
FP	隈	0	信藤	0
FP	木原	0	篠崎	0

6（1）7MT（1）7

▽反則退場者なし

前半は両チームともプレーが荒く、しかもサイド攻撃がなかったので単調そのもの。真っ正面からの攻撃なので容易に得点に結びつかない。大洋は動きが悪く、パスも短い。田村紡は若さにまかせて走りまくったものの、大洋の厚いディフェンスを破れない。こうしているうちに先取点は田村紡があげた。4分水谷が右45度から好シュートした。大洋も6分久連松が中央からシュートして左すみに決めて1—1。12分大洋はフリースローのチャンス。久連松、西村がポイントに立ち、久連松が目もさめるようなフリーシュート。これが決まって2—1。大洋得意のプレー。15分田村紡は速攻から小林がゲット、16分大洋は再びフリースローから新保がフリーシュートを決めて3—2。17分田村は内藤のジャンプシュートで3—3と三たび同点となって勝負を後半に持ち込んだ。

後半はまず大洋が2分30秒に7MTを得た。これは失敗したが3分30秒に久連松がポストプレーから決めて4—3。このあと田村は大きな反則をした。というのは大洋GKのボール出しがよく、田村紡GKの渡辺（美）がエリアから出てカットしようとした。ところがこれを後逸、あわてた田村紡のFPはエリアの中に飛び込んでこのボールをコートの外へ押し出した。これで大洋は幸運にも7MTを得、射場がこれを決めて5—3。このあと7分30秒にもGKのすばらしいボール出しから西村—久連松と渡って6—3とした。

これで〃勝負あった〃かとみえたが、田村紡は反撃した。14分右45度の地点からきれいなリターンパス、これを小林が決め、15分には内藤—清水の速攻で6—5と1点差に詰めよった。大洋はベンチで休養していた久連松、西村を出して防戦に努めたが、16分小林に7MTを決められ6—6。残り時間はあと4分。1点取った方が勝ち—激しい攻防戦を展開。だが大洋は豊富な試合経験がものをいった。タイムアップ寸前に大洋はローリングパスで田村ディフェンスをゆさぶり、久連松がポストにはいった瞬間、西村が好トス。久連松はふり向きざまゲットして決勝点をあげ、田村ボールになったところでホイッスル。西村は久連松

にトスしたとき、一瞬ニャッと笑ったのが印象的だった。（鴛尾）

西村5点をあげる
大崎、2連勝ならず

▽女子決勝リーグ最終日

大洋デパート 8（4—2、4—5）7 大崎電気

「レフェリー」岡村（教大出）

得	大洋	
0	山口	GK
0	小原	GK
1	久連松	FP
5	西村	FP
1	高山	FP
0	中村	FP
0	枝尾	FP
1	新保	FP
0	射場	FP
0	稲田	FP
0	隈	FP

得	大崎	
0	古谷	GK
0	川崎	GK
1	早川	FP
0	宇井	FP
2	鈴木	FP
0	黒川	FP
2	永井	FP
0	伊藤	FP
0	加藤	FP
2	笠原	FP

7（2）7MT（1）8

▽反則退場者なし

〔評〕大洋はエース西村の大活躍で2連勝をねらう大崎を押えた。準決勝までの西村のプレーを見ていたので、こんなにやるとは思わなかった。西村は1962年の世界選手権大会で5本の指にはいるといわれた選手だけのことはある。「監督さんからきょうはロングを打てといわれました。それで最初からロングを打ったのです。それがみんなはいってしまったので私自身が驚いているんです」と西村が言っているように、立ち上がりからロングを飛ばした。大崎も早川に打たせ、激しい打ち合いを展開した。この打ち合いは試合前には全然予想もしなかった。大崎は速攻、ロングがあるが、大洋にはこれがあまりない。フリースローからの得点が多いからだ。ここに大洋の作戦があったと思う。前半2分大崎は永井が7MTを決めて先行したが、3分30秒大洋は西村がセンターラインから一直線に突っ走り、フリースローラインでワンフェイントをかけて大崎の鈴木を抜き、スピードに乗ってロングシュート。これが見事に決まった。5分にまたも西村がロングを決めて2—1とリード、大崎はこの西村に対しての〝詰め〟が甘かった。最初の一発は西村のスピードに気遅れてして一歩前に出ることを忘れた。大崎は1—5あるいは2—4のディフェンスを交互に使いわけていたが、最初のロングのときは1—5だった。これが2—4だったら、おそらく西村は突進できなかったろう。このあとしばらく得点がなかったが、14分30秒大洋は西村の好パスを受けた新保が左サイドから決めて3—1と2点差をつけた。大崎もすぐ反撃して15分に大洋ボールをカットし、早川がノーマークで右すみへ決めて3—2とした。18分西村がセンターライン近くから突っ込み、ランニング・シュート。西村の強打の前に大崎ディフェンスは施す手がなかった。シューターへの当たりもあまりなかった。前半は4—2で大洋リード。

後半になると大崎は捨て身でぶつかった。まず30秒大崎はGK古谷の正確なパスアウトから鈴木がノーマークで決めて4—3。ここで大崎は一息入れたのが悪かった。大洋は1分高山が左サイドから、1分30秒久連松が7MTを決めてすぐ6—3と3点差にした。大崎にとってこの3点差は痛かった。5分大崎は永井が7MTを決めれば、大洋も6分に西村がまたもロングを飛ばして依然3点差の7—4。試合はこのまま終わるのではないかと思った。

大洋は8分すぎ西村、久連松をベンチに入れた。大崎はこのスキをついて必死に反撃。9分笠原がノーマークで持ち込み、10分には鈴木が右45度からワンバウンド・シュートして7—6と1点差に追いすがった。大洋は急いで西村、久連松を送り込んで大崎の反撃を食い止めようとした。ここから激しい攻防戦を展開。大崎は15分笠原がロングを見事に決めて7—7とタイスコア。大崎ベンチは明るさを取り戻した。

大崎が攻めれば大洋はがっちり守る。大洋が攻めれば大崎は激しくアタックして守る。決勝の1点はなかなか取れない。時間はどんどん経過していく。16分、17分、18分、19分と…。残り時間はあと60秒。大洋が大崎ゴール前で激しくゆさぶる。このとき大洋ベンチから「あと30秒」の声がかかった。これが大洋優勝の因となった。ゴール中央にした西村はさっと左サイドへ走った。西村得点の左サイド攻撃である。大崎GK古谷が下半身が弱いことをよく知っている西村はシュート・モーションにはいる。一瞬古谷の両足がわずかにあいた。西村は倒れ込むようにして古谷の足をねらってシュート。ボールは一直線に古谷の両足の間をきれいに抜いてゴールイン。これで勝負がついた。おどり上がる大洋、うなだれる大崎。勝負はきびしいものだ。大崎ボールになったとき、岡村主審のホイッスル。（鴛尾）

田村紡3位

田村紡 18（10—1、8—3）4 愛知紡

「レフェリー」中西（日体大出）

得	愛知	
0	篠崎	GK
0	原田	GK
0	韮崎	FP
2	伊藤	FP
2	古谷	FP
0	関口	FP
0	高橋	FP
0	近藤	FP
0	村上	FP
0	小野	FP
0	鏡	FP

得	田村	
0	渡辺美	GK
0	坂上	GK
1	種村	FP
0	川口	FP
7	水谷	FP
3	小林	FP
1	内藤	FP
5	渡辺好	FP
1	清水	FP
0	渡辺信	FP
0	信藤	FP

18（3）7MT（0）4

▽反則退場者　内藤

〔評〕田村紡の圧勝。若さとスピードにまかせて走りまくった。愛知紡はこのスピードについてい

けず、愛知紡GKの篠崎は右に左に飛び上がって田村紡のシュートをとめようとする。ボールは無情にもゴールへ…。篠崎は少しもいやな顔をせず、若い同僚を励ましていた姿は非常に好感を持たれた。点差が開けば選手を交代させるチームが多いが、愛知紡ベンチは最後まで篠崎を変えなかった。かわいそうに思うけれど、このつらい体験がやがては実を結ぶだろう。

田村紡のチームプレーはすばらしかった。ゴール前でのワン・フェイント、リターンパスで愛知紡ディフェンスを簡単に破った。速攻もよかったが、もっと両サイドを使ってみたらどうだろうか。ゴール真正面だけの攻撃は少し単調すぎる。水谷、渡辺好、小林らがよく走り、GKの渡辺美もよく守った。前半で10－1と大差がついてしまったが、愛知紡はタイムアップまで古谷を中心によくがんばった。愛知紡はエース小林の病気欠場がなんとしても痛いが、往年の愛知紡に早くなってほしい。サウスポーの伊藤は身長があるので、スピードをつけたら将来がたのしみ。（鴛尾）

		試合	勝数	負数
1.	大洋	3	3	0
2.	大崎	3	2	1
3.	田村	3	1	2
4.	愛知	3	0	3

総評

名勝負だった大洋―大崎戦
がんばった芝浦工大

藤田八郎（大会副審判長 熊本県協会理事長）

台風17号を極度に心配しながら幕を明けた本大会も好運にも天候に恵まれ、関係者の努力と協力によって無事初期の目的を達成した。特に本年は女子の部において決勝リーグ制を試みたが、大成功であった。初めてハンドボールを見る人たちの前に、技倆伯仲の4チームが3日間にわたって熱戦を繰り広げた。これはファンを獲得するための普及策としては欠くことのできないものだろうと考えられる。今後このことについては真剣に検討されなければなるまい。

女子は、大洋デパートが2年ぶりに2度目の優勝を飾った。全勝同士の大崎電気との決戦において〝ベテラン西村〟が見せた活躍はりっぱであった。特にタイムアップ寸前の5秒前に左コーナー角度0の位置から奪った決勝点は印象的であり、最近の名勝負といっても過言ではなかろう。

昨年のチャンピオン大崎電気は残り5秒で2連勝をはばまれた。引き分けにすれば計算上大崎電気の優勝となったのだが、これが勝負の世界というものだろうか。それにしても対大洋戦のディフェンスは甘すぎた。前日まで見せたあの鋭い「詰め」を忘れていたために、大洋の「走り」をさそった結果になった。3位の田村紡、4位の愛知紡ともに順当な試合内容を展開した。しかしながら愛知紡は往年の王者の面影は全く消え失せた。奮起を望んでいるのは一人筆者のみではあるまい。進境いちじるしかったのは東京重機である。2回戦で不運にも優勝チーム大洋と対戦した。不幸にして13－11で敗れはしたが、堂々と四つ相撲を展開してタイムアップ寸前まで予断を許さない好試合をやった。今後の活躍が楽しみである。

一方男子は予想どおり実業団の王者大崎電気と学生チャンピオン芝浦工大との決勝になった。準決勝終了までの大方の見方は6分4分で芝浦工大有利とのことであった。不幸にも決戦の前夜に全く予期しない食中毒に見舞われた。競技場に姿を現わした芝浦工大選手の顔色はとても試合ができるものではなかった。果たせるかな、大差のゲームとなった。しかし最後まで学生らしく気力で競技したその闘志は称讃すべきであり、同情するものである。相手が満身創痍とはいえ、昨年に引き続きチャンピオンの座についた大崎電気はりっぱであった。ベテラン竹野、宮原、藤、北村、井上らが走りまくって多彩な攻撃を展開した。海外遠征などの豊富な経験がじゅうぶん生かされていた。その他では初出場ながらよく3位に食い込んだ大阪イーグルス、学生らしい真剣なプレーで共感を呼んだ京大などが印象に残った。

◇ ◇ ◇

長崎で全日本教職員開く

大阪イーグルス、再び優勝

G・T・C（岐阜）の善戦目だつ

熊本教員が2位に

第8回全日本教職員選手権大会は8月17日から3日間、長崎市駒場の長崎国際体育館に17チーム（棄権1）が参加して行なわれた。その結果、大阪イーグルスが連続優勝した。

▽1回戦（1試合）

香川教員ク（香川）20（9－9 11－7）16 埼玉教員ク（埼玉）

▽2回戦

福岡教員ク（福岡）25（12－9 13－5）14 全神奈川教員団

大分教員（大分）22（8－8 14－6）14 福井教員（福井）

G・T・C（岐阜）18（10－5 8－5）10 山口県教員団

熊本教員（熊本）不戦勝 興東ク（奈良）

スワロー兵庫（兵庫）39（19－6 20－7）13 栃木教員ク（栃木）

三重教員ク（三重）19（12－8 7－8）16 長崎教員（長崎）

大阪イーグルス（大阪前回優勝）29（16－8 13－6）14 香川教員ク（香川）

▽準々決勝

愛媛教員（愛媛）32（15－12 17－6）18 宮崎県教員団

大阪イーグルス 21（11－7 10－1）8 福岡教員ク

G・T・C 20（12－9 8－3）12 大分教員

スワロー兵庫 38（19－5 19－8）13 三重教員ク

熊本教員 37（17－10 20－4）14 愛媛教員

▽準決勝

大阪イーグルス 17（7－7 10－9）16 G・T・C

熊本教員 21（9－11 12－7）18 スワロー兵庫

▽3位決定戦

G・T・C 23（15－10 8－4）14 スワロー兵庫

▽決勝

大阪イーグルス 21（8－6 13－7）13 熊本教員

得	熊本		大阪	得
0	島田	GK	光島	0
0	谷脇	GK	島崎	0
1	荒木	FP	松尾	0
1	津田	FP	山本	0
3	広田	FP	丸岡	1
0	森	FP	東	1
2	米石	FP	藤井	0
0	緒方	FP	井上	5
6	沢田	FP	青木	10
0	松田	FP	北岡	2
0	竹原	FP	加藤	2
13	(2)	7MT	(0)	21

中西敬一

総評

長崎市開催が決定したとき、果たして何チーム参加するだろうかと心配した。ところが17チームが参加し、盛大に開催された。大会に先だち参加チーム数はもちろんのこと、大会役員とくにゴールジャッジ、記録などに経験者が少なく、関係者の心配もあった。しかし試合が進むにつれて慣れ、心配はなかった。ただ惜しまれることは、観衆が少なかったことだ。この点についてはまだ県、市民に知られていない競技だからやむを得ない。だが44年の第24回国体開催が決定し、県、市、協会としても本腰を入れないと、ちょっと心配だ。各種大会を積極的に開催し、競技に対する関心を深めるとともにいろいろな経験を積まなければならないだろう。幸いにして41年に開催される全九州大会、県内各種大会。43年の全日本総合などで万全の準備を整えると思う。

この大会はそのつど注意されていたマナーの点についての心配がなかった。指導者としての自覚のもと日ごろ練習した技倆を最大限に発揮し、負けチームも試合をあきらめることなくがんばったことはよかった。

優勝の大阪イーグルスは国外、国内大会の経験豊富な選手を中心とした試合運びの巧者。準優勝熊本教員はチームワークの良さ。早いパス、強力なシュートを備えたスワロー兵庫。いちじるしい進歩をとげたGTC、大分教員などが印象に残った。特に新進気鋭の選手をそろえたGTCは準決勝で大阪イーグルスを苦しめ、1点差で敗れたが、スワロー兵庫を破って堂々3位に入賞した。その善戦ぶりは賞されていい。ただ1－2回戦で試合運び、技術面にやや物たりなさを感じたが、準決勝、決勝と進むにつれてその感も薄らぎ、大会運営とともに有意義な大会となった。

（大会副審判長）

GH－6B17硬度 1ダース ￥600

三菱鉛筆

全日本を色どった3チーム

球界パトロール

大阪イーグルス

前身は大阪教員団。〃ベテランの味〃というのはこのチームのために用意された言葉みたいだ。全日本総合選手権2回戦で、後半試合をひっくり返された慶大の選手に言わせると『負けたというよりシテやられたという感じ』だったそうだ。それもそのはず。メンバーはいずれも学生時代から国内を代表するプレーヤー、東(第5回世界室内、中国)、青木、島崎(ともに中国)らは海外遠征の経験者。その他の選手もほとんどが西ドイツ戦やルーマニア戦に出場しており、百戦練磨のベテランばかり。一党をまとめる村田弘氏(41)はかって大阪クにあり、国体連勝の立て役者。このチームに打ってつけのキャリアの持ち主だ。個人技の優秀さもさることながら、メンバーがそろって「メシよりハンドボールが好き」なのも有力な武器。

教員チームというと、勤務先がまちまち。まとまった練習ができにくいものだが、そうしたハンディを吹き飛ばしている。日体大OBを主にして編成している。そのためチームの結束は堅いし、試合をしながら、調子をあげて行くなどといった老かいさはちょっとマネができない。昨年からゆかりの鷲(イーグル)をニックネームにしているが、前身時代から通算すると全日本教職員4連勝、国体教員3連勝と教員界ではこの4年間負けを知らない。今夏は全日本教職員から続く強行日程にもかかわらず慶大、同志社大といった東西学生の一部校を連破してベスト4に進出。期待どおりの実力発揮であった。

今秋の国体でも4連勝は堅い。教員界から初めて『年度協会優秀チーム』に推されるのではないかとささやかれている。かつて全盛を極めた日体系も、最近は本家格の日体大クが優勝に縁遠くなって斜陽だ。村田氏は『みんな年でもうダメですヨ』と言うが、この鷲はまだまだ当分あばれそう。「全国制覇」というエモノをねらって満々たる闘志を秘めているようである。

全国高校に初出場し、準優勝した名城大付属高。白帽が小川コーチ

名城大付属高

『人間形成というとおおげさになりますが、つまり根性の養成。これが実ったのが準優勝の大きな原因ですヨ』とコーチの小川安人君(同校体育課勤務・桜台高OB)は言う。小川コーチは今年21歳。若い。3年前にチーム結成と同時にコーチを引き受けた。このときは19歳だった。しかし桜台高3年のとき、全国高校(第14回)国体高校(第17回)に優勝し、訪韓全日本高校の一員に選抜されるなど球歴は特級。したがって指導法も「桜台流」だ。卒業直後に選手とともに走りまくれる体力があったのは、結成まもないチームにとっては打ってつけだった。いまは一日多くて4時間の練習だが、コーチになった年は6時間ぶっ通しでウサギとびやダッシュ練習をしたこともある。

『そうすることが桜台を破ることになるのだし』と彼は言う。選手たちもこれをよくわきまえている。有本主将はチームの特色を『スタミナだ』と言い切るほど。主力のほとんどが中学時代からの経験者だったこと。初出場であまりマークされなかったことなど、今夏の同校はラッキーな面も多かった。しかし今夏の躍進で得た〃自信〃は今後の同校に大きな力となろう。校内の同部への関心も一段と高まってきたという。小川コーチも選手たちも『今年の成績がフロックだと言われないよう一層がんばる』と言う。群雄割拠する愛知球界に出現したこの新しい星は、かつての中京商のように桜台をしのぐ輝きを見せることができるだろうか。今後の活躍を期待を持って見守りたい。

興南高

沖縄から迎えたこの新しい仲間については前号でも報告されているが、『参加するだけではなく、勝ってこそ意義がある』とした監督、コーチ選手たちの心に記者はあらためて絶賛の拍手を送りたいと思う。実のところ、興南が2勝して3回戦に進出したのは意外だった。緒戦の相手が3年連続9回目の出場という四国の名門土佐(高知)では荷が重そうに見えたし、チームを編成して一カ月たらずというのではなおさらその感を強くした。ところがバスケットボール流の攻法ながらあざやかなボールさばき。土佐に次いで都城泉ケ丘(宮崎＝初出場)まで破ってしまった。

日本本土はもとより、汽車を見るのも初めてという選手たちは『なにもかもが感激…』だったが、国内の関係者にとっても同校が2勝をあげた善戦ぶりは感激であった。「よくぞ参加し、よくぞ勝った」というところである。興南進出の陰には福島安積高OBで、琉球大2年の八木一彦君の存在を忘れられない。今春、日本高校代表チームが沖縄を訪問したとき、琉球大の選手として出場した。それを機に発足した沖縄高校界と接触するようになった。興南が代表に決まってからは連日4時間近い猛練習を指導した。八木君はハンドボールがものすごく好きだ。

選手たちはこの八木君の情熱に引きずられ、つい最近までバスケットボール選手であったことを忘れた。そして熊本に乗り込んだときは、もうハンドボール選手になりきっていたのである。大会前に練習試合を心よく引き受けてくれた福島安積高や熊本高の親切は『細かいルールがわからなかっただけにほんとうにありがたかった』(上原稔主将の話)し、宿舎の自衛隊健軍基地が大会後に阿蘇見物に招待してくれたのも忘れられないという。心温まる話だ。そして『みなさんの善意にこたえるために来年はもっと強くなってきます』と話していた。(了)

楽書帖

桜台を頂点に不滅の愛知勢

杉山　茂

○…今夏のインター・ハイの決勝(男子)が桜台と名城大付属という愛知勢同士の対戦に決まったとき、コートサイドの記者席は『愛知は強いんだなあ』という声と、『他の県はなにをしているんだ』という声の二つに分かれた。この二つの声を栗脇愛知県理事長にぶっつけてみると『県3位の中京商が出ていれば、ベスト4のうち三つは、ウチの県で占めますヨ』とこともなげに言った。9回目の優勝を記録し、全国タイトルの獲得がこれで18になったという桜台の稲石監督の言葉がこれまたすごい。『正直にいって、ことしの大会で桜台と名城大付属の力は他県に比べて段違いなものがありました。これは〝基礎〟の差です。大部分の学校は〝ハンドボールごっこ〟の域を出ていませんヨ』

○…両氏のこの自信。いったいどこから生まれてくるのだろうと思う方は、愛知県の高校大会の会場に行って見られるとよい。なんと男子50校、女子29校が参加して、炎天下に砂煙を巻き立たせて熱戦を展開しているのである。インター・ハイなみの日程で、控え室には10人を越す審判員諸氏がいそがしそうに出入りしている。男子の場合、多いところでは6試合を勝ち抜かぬと県の1位になれないのだ。桜台が登場する。相手はA校。コートサイドは試合を終わった他校の選手で二重に取り囲まれる。二百人はいようか――。部長、監督クラスの人の顔も交じる。高校離れした速攻、シュート、ため息に似た嘆声がもれる。しかし、このファインプレーを見せつけられるたびにだれの胸中にも『打倒桜台』の火が燃えるのである。

○…桜台を破ることは全国を制することだ。そして、それには唯一の方法しかない。基礎体力、基礎技術の充実である。かつて桜台に代わり王座についた中京商の成功はそこにあった。いままた、名城大付属が桜台高OB小川安人君をコーチに迎えて桜台の牙城に迫りつつあるのも、その一点の成功に負うところが大きい。

○…愛知球界で育つ選手は有名無名を問はず「自分たちはトップ・ゾーンでもまれた」という自信を持っている。全国最強の激戦地の予選に出たということが〝誇り〟とされている。ことしの全日本学生東西対抗出場30人のうち、10人が愛知県の高校出身者なのもその一例ではないか。そして選手たちの誇りが愛知球界の自信に実っているのである。選手たちの気力、闘志。指導者の情勢を見るとき、ハンドボール王国愛知の真の姿を見つけることができる。この王国―おそらく不滅なのではなかろうか。(NHK勤務)

時評

ストーリングに反則を

審判員は遠慮するな!

本誌24号(7月号)にジャン・ドレザル氏(チェコスロバキア)が「人気のある審判員の能力テスト」の一文はおもしろく読んだ。とくに興味があったのは「(5)競技の遅延」である。このなかで故意による競技遅延の項である。これは全国の審判員はもとよりハンドボール選手はよく知っておいてもらいたいと思う。ドレザル氏は「攻撃選手が相手守備陣の空いている場所へ進み、その位置に停止してボールをタライ回し、あるいは凍結する方法である。これは最も大きな反則である」といっている。これは大いに注目すべき発言である。

これは「ストーリング」と見ていい。日本ではこのストーリングが使われている。とくに接戦になったとき、リードしているチームは逃げ込みをはかる。ひとつの作戦だからなんともいえないが、どうもスポーツマン・シップに反するような気がする。明らかにストーリングとわかっていても、レフェリーはあえてホイッスルを吹こうとしない。スタンドで見ているとヤキモキする。これを〝反則〟としてホイッスルを吹いてもらいたい。「レフェリーの主観だから仕方がない」といえばそれまでだが、アマチュア・スポーツなのだから正々堂々とプレーすることを願っている。バスケットボールでは〝30秒ルール〟というのがある。つまり味方ボールになったら30秒以内にシュートしなければいけない規定になっている。これはストーリング防止の方法としてはいい。だからといってハンドボールにこの30秒ルールを適用しろとはいわない。

さらにドレザル氏は「競技遅延に対する罰則として最初の違反のとき、フリースローのホイッスルを吹き、手を上げる。上げられた手は競技遅延により課せられるチームに対する注意を意味する。2度目の違反のとき、審判員は2分間退場を命じなければばならない」といっている。これはただ単にストーリングのことだけでなく、時間かせぎのために無駄なドリブル、パスの繰り返しによる競技時間の遅延防止をも含んでいる。時間かせぎも作戦の一つという人もいるだろうが、これは感心できない。ストーリングと全く同じである。ハンドボールは〝スピードとスリル〟が売りものである。それが時間かせぎといってノンビリやられてはハンドボールの良さが消滅してしまう。速攻の応酬があってこそハンドボールなのだ。日本のレフェリー諸君はドレザル氏の一文をもう一度よく読んでもらいたい。日本協会の審判部でも研究してほしい。(鷲尾武治)

◇　◇　◇

――ベルギー「体育レビュー」誌から――

「個人の機能」を100％果たしているか

ベラ・クラトッシュビロバ

技術練習

1964年にプラハで開れた第5回男子7人制ハンドボール世界選手権大会でハンドボールが技術、戦術、練習方法の面でも、また対戦中のチームの指導（コーチング）方法の面でも急速な発展をとげたことがよくわかった。この発展は7人制が行なわれているすべての国で見られ、準決勝に進出できなかったチームの対戦中にも競技内容を豊かにする新しい要素が見られた。

たとえばルーマニア、スウェーデン、チェコスロバキアの各選手による倒れ込みシュートを比較すると興味がある。各国それぞれに特徴を持っている。ソ連のサイド選手はシュートについて新しい考え方を示した。またルーマニア選手はいままで見られなかったむずかしいパスを実行した。ソ連対ルーマニア戦の前半にソ連の優秀な攻撃選手レベディェフは25回の守備活動に参加した。これはナショナル・チームとして最終的に固められたチームの選手の場合でも、プレーの個々の技術についての練習および新しい戦術要素の訓練が必要であることを明らかにするのに役立った。

ベラ・クラトッシュビロバ
（筆者紹介）
プラハ中央体育学校教授。チェコスロバキア女子ナショナル・チーム正選手。チェコスロバキアハンドボール協会技術委員会委員。

競技には二つの局面（攻撃局面および守備局面）がチーム活動として交互に現われる。その二つの各局面は各選手にそれぞれ違った任務を要求し、違った方法が用いられる。競技を動かして行く原動力となる活動は、各人の攻撃活動および守備活動の形をとって現われる。同僚の協力がなければ、試合の状況を転換させることはできない。攻撃および守備のコンビネーションでは2人または数人の選手がタイミングを合わせ、位置と戦術を示し合わせて行動をとる。各コンビネーションが成功するための条件は、それを行なう選手が戦術上の目的において完全に一致していることである。攻撃および守備のシステムはチーム全体としての試合方法を決めるものである。ハンドボールでは攻撃局面および守備局面で、選手の占めるそれぞれの位置によって役割りが決められる。各選手はそれぞれポスト選手、サイド選手、浮いている選手として、その個人個人の機能をじゅうぶん果たさねばならない点が特徴である。

（A）個人の攻撃動作

ハンドボールの全体としての競技は、いろいろな活動を含む個人のプレーを基礎として成り立っている。選手個人の力が組織として動き、競技のそれぞれの状況を変えていくものである。攻撃動作として次のものがある。

――マークはずし（ボールを持たない選手の任務）。
――パスおよびキャッチ。
――マークはずし（ボールを持っている選手の任務）。
――シュート。

しかし選手各人はお互いに無関係の個人プレーを抑制し、各人のプレーが連係していなければならない。そうすることによってのみ最も適当な方法で、競技の情勢を変えていくことができる。選手個人の技術はいろいろのコンビネーション、システムの基礎である。さらに競技そのものの基礎でもあることを強調したい。選手はチームとしての練習とともに、たえず個人的技術の向上に努めねばならない。個人技術の練習は完成したとみられることは決してありえない。つねに新しい要素を学びとり、それを日々のプレーに適用していくことが必要である。

I、ボールを持たない選手の行なうマークはずし

ボールのない選手のマークはずし動作は、たえずプレーを行なうに適当な位置を求めようとすることを前提とする。チームがボールを得たらすぐ選手は速攻反撃のためにも自分のマークをはずす。攻撃の第二の局面では選手は自由な空間（あいている場所）へはいり込む。選手がマークをはずした場所と、ボールを持っている自軍選手およびその相手選手の位置の関係から情勢はそれぞれ違ってくる。ボールのない選手のマークはずしとして次の構成による動作が基礎となろう。

基本的な攻撃動作→ボールなしのスタート→ダッシュ→横の移動→ストップ→方向転換→進行。

「基礎練習例」

（1）ある線上から後ろ向きにスタート、途中で前向きになる。第二の線上までダッシュ、第二線上でストップ、再度後進。二線間距離は10～20メートル、2人で競争。

（2）前へスタート。途中で前向きとんぼ返り。第二線まで到達、次いで最初の位置に戻る。2

人で競争。

（3）選手1は選手2の後ろ1・5メートルに位置する。コーチが地面にボールを投げる。1、2選手スタート。選手1は決められた限度内で（第二線に選手2がボールを取って到着する前に）選手2にタッチしようと努める。

（4）ある線上から駆け足。コーチがボールで合い図。ボールを頭上に投げた場合、5メートルダッシュ。地面にバウンドさせたときストップ。2人ずつ。

（5）攻撃選手と守備選手が前進する。守備選手は突然停止する。攻撃選手は遅れて反応停止する。攻撃選手はL字形に位置をずらしてマークをはずす。

（6）二列縦隊に整列。第一列選手2人が第二線までの短距離を往復2回全力でダッシュ。次に横に進む。第二線で向きを変える。同じ方法で戻る。再度前進。第二線上でとんぼ返り。できるだけ早く元の位置に戻る。2人で競争。

「競技練習例」

（1）両サイド守備位置に守備選手2人が立つ。攻撃選手2人がパスを交わす。一方の攻撃選手がシュートを行なうと直ちに反対側の攻撃選手は始動し、速攻反撃を行なう。守備選手のマークをはずすよう努力する。

（2）攻撃選手がゴールキーパーの手にシュートする。ゴールキーパーがボールを持ちつづける間は速攻反撃の開始を意味する。次いでボールを地面にバウンドさせたとき、相手がボール取り戻したこととする。このとき、選手はすぐ自分の行動を中止して元のポジションに戻る。攻撃選手はマークをはずすよう努力する。

II、パス・キャッチ

パス・キャッチの概念には緊密に連係されたいくつかの動作の複合により成立する攻撃活動であるという考えが含まれている。その要素として

——ボールのキャッチ。
——ボールのプッシュ。
——パス。

がある。

ボールのキャッチ

キャッチという言葉には、飛んでいるボールを取ること。またはその速度の減殺支配という意味が含まれている。受け取る動作にはボールを持たない選手のマークはずし動作が先行しなければならない。そうすることによってボールを持ってからの攻撃動作が容易になる。キャッチは確実でなければならない。プレーのそれぞれの情勢に従ってあるキャッ・フォームを選ばねばならないことがある。

ボールのプッシュ

地面を転がっているボール、あるいは地面に静止しているボールをプッシュする動作は、攻撃選手が低くかつ正確さを期待できないパスを受けたいとき、またはグウランドが柔かくてボールがレギュラー・バウンドしないときに用いられる。プッシュ動作はできるだけ速くしなければならない。またその間自己チーム選手の動きを自分の目から失ってはいけない。ボールが進行方向に転がっている場合は、必要の間に片手による短いプッシュを連続的に利用する。そのとき、もう一方の手は上方でいつでもボールを取れるよう準備する。

パス

パスとは自軍選手がそれを受け、自己の活動を有利に続行できるような方法で、自軍選手に向かってボールを投げることであると理解する。パスは非常に短時間で終わり、しかもその実行は複雑である。選手はそのとき、そのときの状況に対して最も適当なパスを選択しなければいけない。その方向、速度を適切に選択する。相手の手を避け、自軍選手が最も有利に活動できるようにしなければいけない。

選手は練習のつど、パスとキャッチの技術をなんども繰り返し練習することで「ボールになじむ」ことができる。基本的なパス練習のあと、初めて特殊なパスの練習を始める。使いこなせるパスの種類、内容が豊富な選手は相手守備陣にとっては非常に危険な選手である。

パスの種類

（1）基本的なパス
A、片手で肩からのパス
B、両手で頭上からのパス

（2）特殊なパス
A、片手で背中からのパス
B、アンダー・パス
C、プッシュ・パス
D、フック・パス
E、片手で後頭部からのパス
F、片手での後方へのパス
G、バウンドパス（両手の場合も含む）

基本的なパスは次号の新人訓練の章で述べるから、ここでは特殊なパスについて述べる。

片手で背中からのパスは、守備ラインに非常に接近しているときに使われる。このパスを行なう場合、通常フェイント・シュートまたはジャンプが先行する。守備選手はシュートの防備に目を向けており、しばしば背中からの予期しないパスに気がつかない。このパスを行なうに当たっては自分の左の側腹を相手に向け、ボールを右胴へ持ってくる。準備ができると右手を胴の後ろへ動かし、手首の動作でボールを投げる。ジャンプでこのパスを行なう方法は両手にボールを持ってジャンプし、シュートするように右手を突き出す。前に出した腕の反動を利用して背中でパスをする。

後頭部からのパスは通常肩からのフェイントシュートのあと行なわれる。準備は片手で肩からのパスの場合と同様である。このパスは迅速に、右肩を後ろへ持ってきて実行する。人差し指と親指の間の手のひらでボールを投げる。もう一つの方法は腕を側面に突き出し、次にヒジを曲げながら手首と指の働きを使ってボールを投げる方法がある。

（基礎練習例）

（1）選手1は選手2にボールを頭上から投げる。選手2はそのとき同時に選手1にパスを送る。選手1は選手2にボールを返し、同時に自分の元のボールを受け取る。

（2）ボールを持たない選手1人に対しボールを持つ選手2人が位置につく。ボールを持った選手は交互にボールを持たない選手に間隔をおかず早くパスを送る。パスを受けたら返す。

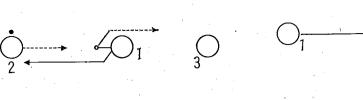
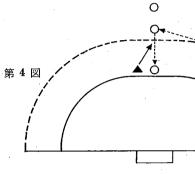
（3）選手1は選手2がボールを拾って選手3にパス。反対側位置へ行く。

（4）正方形の四すみに4人の選手が位置する。選手1は対角線上の選手3にパス。中央へ走り、受け身の守備選手の役につく。ボールを受けた選手3はフェイントシュートなどを使い、右または

第1図

第2図

第3図

第4図

左、すなわち選手2または選手4へうまくパスする。選手1と選手3は役割りを交代する。他の選手も同様の練習をする。

(5) ボールを持った選手2に対し、2人の選手が1および3一線上に間隔を置いて位置する。選手1は選手2に向かってスタート。選手2は選手1にパス。選手1はボールを受け、選手3にジャンプしながら向きを変えてパス。次にパスと反対側へ走る。そのとき選手2は選手3の方向へスタート、選手1と入れ替わる。

(6) 一列縦隊に待機している選手の前方にポスト選手1人と、それに対する守備選手1人が位置する。選手1は前進中の選手2にパス。選手2はフェイント・シュートなどを使い、守備選手にマークされているポスト選手にうまくパスする。

(7) 限定された場所の中に数人の選手が散らばる。最初2人の選手がパスを行ないながら、ボールを持った状態で他の選手にタッチするよう努める。タッチされた選手は追う側に加わる。全員がタッチされたとき相手なしでこの練習は終わる。

(競技練習例)

(1) 選手1は左サイドからドリブルで中央へ出てくる。正面フリースロー・ラインにいる選手にパスする。その選手はフェイント・シュートをしたあと、ポスト選手にパスする。ポスト選手は選手1にボールを返す。

(2) 浮いた選手は左の浮いた選手にパスする。左の浮いた選手はフェイント・シュートなどでサイドの守備選手2人の注意を引きつける。次に左の浮いた選手は進入してくる左サイド選手にパスする。左サイド選手はジャンプして右サイド選手にパスする。この方法により背中からのパスおよび後頭部からのパスをマスターすることができる。

(3) 右サイド選手はドリブルしてセンター方向に進む。フェイントのあと、クロスしてきた右の浮いた選手にパスする。右の浮いた位置の選手はジャンプして左サイドにパスする。左サイドは右サイドへポジションを変えて、はいってきている選手にパスする。この方法によりフェイント・シュートのあと、行なわれる後方へのパスをマスターすることができる。

「検定方法例」

(1) 最初にある秒数を決めておく。選手1はある線上からスタートして、連続的に選手2および3にパスをしながら走る。時間がきたら合い図を受けてボールをできるだけ遠くに投げる。この走った距離にボールを投げた距離を加えたスコアでもって選手の進歩状況を判断する。

III ボールを持っている選手の行なうマークはずし

試合中に攻撃選手が自分の前に自由な空間を有する状況にある場合がしばしばある。その場合、その状況を最も有効に活用して次のボールを持った行動に適した位置を占めるよう努力しなければならない。次のボールを得てから自由になるには次の動作が基礎的要素となる。

――ドリブルにより
――3歩により
――前に投げることにより
――ピボット・ターン(足を軸とした回転)により

ドリブルとは、ボールをバウンドさせながらあるいは転がしながら行なうボールを伴った選手の移動である。選手は少し開いた指で繰り返しボールをはたくことによりボールを自由にできる。手のひらと指はボールがバウンドしている地面に向かってカップの形になる。繰り返しボールをはたく動作は、腕、手首、指により行なわれる。ドリブルを行なう腕は少し曲げ、前腕をほぼ水平にする。ボールは右足のそばへバウンドさせ、その着地角度は選手の速度により決める。片方の腕は軽く曲げ、敵の行動に対してボールを守る役目

をする。いつでも守らねばならない原則はつねに相手から遠い方の手で、胴によりボールをかばうようにしてドリブルを行なうことである。

ドリブルの最後――ドリブルから他の動作に移ろうとする場合、最後のバウンドをより強く行なわねばならぬ。速攻の場合、シュートに専念するためにはフリースロー・ラインの前でドリブルをやめるのがよい。ドリブルの特殊なケースとしてただ一回のバウンドのドリブルがある。このドリブルは短い距離でマークをはずすためにする。その場合、3歩―バウンド―3歩に続き、パスまたはシュートと構成される。フェイントを伴って行なわれることもある。状況によってはマークをはずし、シュートをするためには3歩を利用するだけでじゅうぶんな場合がある。3歩の間、ボールをからだの前で保持する。

守備選手に接近した位置の場合、敵と反対側にボールを持ち、敵の方にある肩を回転してボールをキープする。自分の前に自由な空間がある場合は直接そこへ3歩を使いいれる。自分の前に敵がいる場合、1歩または2歩横に進んで自由な空間を作る。定位置についている選手がボールを得てマークをはずすとき、ピボット・ターンが使われる。この方法により敵に対し有利な位置を占めることができる。定位置でボールを得た選手がパス、シュート、マークはずしのいずれをも選択できる可能性がある場合、そのマークのはずしは非常に容易である。監督はボールを受けた選手が、この三つのいずれの動作を選ぶのが最も適当であるかを注意してやらねばならない。

「基礎練習例」

（1） ある線上までドリブル。その線上から脚を曲げてのドリブルで元の線上まで戻る。次に中央の線上までドリブルして後進。そこで360度ドリブルして回転。左手でドリブルして元の線上まで戻る。

（2） 選手1は選手2に向かってドリブル。選手2は適宜の合い図で（こぶしを握ると前進、開くと停止）選手1を指し図する。元の位置に戻ると選手2にパス。役割を交代する。

（3） 限られたスペースの中で選手1がドリブルしている選手2をマークすることとする。選手2は常時選手1と一定距離を保つよう努める。選手1はまず前進する。次に加速する。次に方向を変えて移動する。

（4） 選手1は選手2にパスに対する守備選手となる。選手2はドリブルにより前進しマークをはずす。選手1の元の位置に到達して、選手3にパス。選手2および4が同様のことを行なう。

（5） パスを受けた攻撃、選手が自分のポジションに対する守備選手を引きつけるよう努める。次にエリア・ライン上へのワンバウンド・ドリブルでマークをはずす。

（6） 一方のゾーンに攻撃選手が一列にならぶ。コートの反対側にボールを置く。中央部ゾーンに守備選手がはいる（攻撃選手4人。守備選手3人、ボールは攻撃選手の数だけ）。攻撃選手は走って行ってボールを取り、元のゾーンまでドリブルして戻る。守備選手は攻撃選手がボールを持たないときは手でタッチし、ドリブルしているときはカットするよう努める。いずれの動作も競技規則どおり行なうこととする。

「競技練習例」

（1） 浮いた位置の選手1はサイド選手2とのロスしてパス。パスを受けた選手2は進入してくる選手3にパス。選手はフェイント・シュート、自分に向かってくる守備選手の側面を抜き、ワンバウンド・ドリブルでマークをはずす。

（2） 右サイド選手が中央部へ進入する。右の浮いた位置の選手からパスを受け、進行方向を変える。ドリブル1回して達してシュート。

（次回につづく）

日本代表チームは16人

第3回女子7人制世界選手権大会に出場する日本代表チームは、9月21日の日本協会常務理事会で次のように内定した。

▽団長兼監督　高嶋冽（日本協会理事長）
▽コーチ　宮原俊隆（大崎電気女子監督）
▽マネジャー　岩崎美栄子（大崎電気社員）
▽選　手　GK＝古谷芳枝（大崎電気、水海道二高出）川崎幸子（大崎電気、静岡城北高出）FP＝宇井敬子（大崎電気、栃木女高出）鈴木功子（大崎電気、静岡城北高）出黒川泰恵（大崎電気、静岡城北高出）早川清美（大崎電気、半田高出）笠原喜代子（大崎電気、水海道二高出）永井昭子（大崎電気、稲沢高出）加藤井子（大崎電気、新居浜東高出）伊藤せつ子（大崎電気、静岡城北高出）久連松美和子（大洋デパート、熊本市立高出）高山やよい（大洋デパート、菊池農高出）新保いく子（大洋デパート、水俣高出）。

なお10月上旬開かれる全国理事会、全国評議員会で正式に承認される。

◇　◇　◇　◇

ソ連、オランダを破る

第3回女子7人制世界選手権大会

ソ連のニュース

ソ連のニュースはいままで日本にあまりはいってこない。来年の日ソ親善試合を控えて、なんとかソ連チームのことを知りたいと八方手を尽くした。その結果、ソ連のスポーツ紙が手にはいったのでそれを翻訳して掲載した。このうちソ連―オランダの女子の試合があった。本誌で調査したところ、第3回女子7人制世界選手権大会2回戦の第1試合の記録であることがわかった。これは貴重な資料である。

▽ソ連―オランダ第1戦（7月4日、モスクワ市レーニン中央スタジアム）

ソ　連　19（8―2 11―4）6　オランダ

「レフェリ」イー・パーソン（ポーランド）

ソ連女子チームは世界チャンピオンの座に一歩近ずいた。1962年の第一回世界選手権大会ときは6位を占めたにすぎなかった。しかしこのときいらい、ソ連は世界の強豪チームとの親善試合でいちどならずなんども勝ってきた。そしていまソ連チームは世界選手権獲得のチャンスに恵まれている。選抜試合の抽選でソ連チームは非常に恵まれた。ソ連の対戦相手オランダは世界のハンドボール界ではそれほど強くない。この試合でソ連は19―6でソ連の勝利に終わった。ひとことでいえばわれわれの敵ではなかった。

（ソ　連）	得
フダソワ	0
アルタバーエワ	0
グリニュチェ	4
ブンチエスメリ	1
トウリャーコワ	0
ジブイフ	8
カムイシニコワ	0
ヤニレニチェ	1
ペトキエニエ	0
バブルース	2
ストレリニコーワ	3
	16

（オランダ）	得
バン・マーネン	0
サムソン	0
グロートスホルチエン	0
デ・グルート	3
メイエル	1
フレケン	1
バン・エメリク	0
マーセン	0
ギリセン	0
ボス	1
ライス	0
	6

（注）GK、FPの区別がない。

試合の均衡が保たれたのは試合開始後数分間だった。そしてこの均衡を支えたのはオランダの主将兼ゴールキーパーのギン・バン・マーネン選手（29歳）の活躍だった。彼女はオランダチームに10回も選ばれている優秀な選手であり、すぐれた反射神経と勇敢さを持ち合わせている。もっとも彼女は最初は運がよかったともいえる。ソ連の再三にわたる強いシュートはしばしばゴールのポストに当たったのだ。しかし試合開始後7分もたつとソ連の優秀なシューターは次ぎ次ぎにシュートして5―1、6―1……となった。いつものようにワチンチナ・ジブイフ選手はすばらしい活躍をみせた。彼女のシュートはオランダのゴールキーパーをずいぶん苦しめた。他の選手も彼女に遅れずがんばった。オランダ側は攻撃するひまもなかったくらい。

こうして決勝戦への一歩を踏み出した。オランダで行なわれる(7月11日)第2戦でも結果はおそらく同じだろう。しかし今後の予想を立てるさい、オランダのヤーナ・クルエナ・トレーナーの次の意見をじゅうぶん尊重しなければならない。『ソ連チームはあらゆるポジションから力強い正確なシュートを打つ。とくにグリニュチェ、ジブイフ、そして突進力のあるストレリニコーワの3選手がすばらしい。しかしソ連は決勝でルーマニアとか、デンマークがいるということを忘れてはいけない』

ソ連球界の動き

ソ連で少年ハンドボールチームが少なくとも10都市で結成されているとすれば、バクー市もりっぱ・

にその一つにはいれる。バクー市チームは全ソ連で行なわれたハンドボールの試合に参加してきた。しかし全ソ連労組スパルタキアードのプログラムに初めて参加した。第一日はアゼルバイジャン・チーム（バクー市はアゼルバイジャン共和国の首都）はカザフスタン・チームに19—23で敗れてしまった。

とにかく男子のトーナメントには強豪12チームのうち9チームが出場、女子では12チーム全部が出場。決勝6チームに残るチャンスを考える場合、次のことを考慮しなければならない。男子の第1グループは1965年のソ連チャンピオン争奪戦のリーダー、レベジェフとマズールの参加で強化されたマイ・クラブ（モスクワの〝トルード〟とカウナスキーの〝アトレタス〟とロシア共和国チームの間で試合が行なわれること。第二グループはグルジア選抜チーム、すなわちリドビリシの〝つばめ〟第三グループはキエフ市とリボフ市の〝ザポロジャリユミンストロイ〟がレーニングラードの〝トルード〟とともに強い。ウクライナ、リトワ、ロシア共和国はモスクワの〝トルード〟のヘゲモニーを奪い取ろうとがんばっている。

最初の二日間はたいした波乱はなかった、白ロシア青少年チームは中学生スパルタキアードに備えて成人トーナメントに参加した。うまくいったか？。もちろんうまくいった。白ロシアチームは決勝戦出場チームと対等にたたかった。しかし長年の経験を持つチームはどうしてもソ連ハンドボール界のエリートには近づくことができなかった。要するに彼らは競争相手がいないのだ。ミンスク市の

〝うみつばめ〟は15点も20点も得点して勝ったが、別にだれも驚かなかった。白ロシアで試合が行なわれるたびに〝強い練習相手がほしい〟との痛切な叫だが聞かれる。Aクラスに属するラトビアやズペックのハンドボーラーも同じような状態におかれている。よい練習相手がいないので戦術的なくふうが上達しない。戦術は強い相手と一騎打ちを繰り返していくなかでこそ向上する。白ロシアチームは第一戦でレーニングラードチームと対戦した。

白ロシアの複雑なコンビネーションの組み合わせ。4字形のポジション、守りも相手チームにさほどの脅威をもたらさなかった。レーニングラードチームには遠距離から力強いシュートを決めるシューターはいないが、じりじりと敵陣に攻め込むのがうまい。白ロシアチームはラインに並ぶかわりに、ゴール前に独得な体制をつくりメンバーを散らした。白ロシアチームは敗戦が決定的な7—3、9—4、14—5になっても体制を変えなった。体制を変えたくても別の守備体制がとれなかったのだ。結局17—27で敗けた。ラトビアとロシア共和国の試合は技術的にはラトビアに軍配が上がった。効果的な投げ落とし、虚をつくシュートなど。しかしラトビアも練習相手を求めている、ロシアチームは概して単純だが、効果的な攻撃方法—敏速な突進、側面からの通り抜け—を用いた。結局ロシアチームが22—17で勝った。

▽男子（8月7日、13日）

- ・ウクライナ 32—19 白ロシア
- ・ロシア共和国 22—17 ラトビア
- ・ウズベク 30—19 キルギス
- ・レニングラード 23—21 カザフスタン
- ・グルジア 47—16 トルクメン
- ・ウクライナ 20—16 ウズベキスタン
- ・モスクワ 31—20 レニングラード
- ・リトワ 26—17 グルジア

▽女子

- ・エストニア 11—9 白ロシア
- ・モスクワ 21—6 モルダビア
- ・ウクライナ 28—3 トルクメン
- ・ロシア共和国 20—4 グルジア
- ・カザフスタン 10—5 レニングラード
- ・モスクワ 10—6 アゼルバイジャン
- ・ロシア共和国 15—8 エストニア
- ・リトワ 7—6 ウクライナ

〔写真はソ連のスポーツ紙から。**22ページの写真は女子のソ連—オランダ戦**〕

トレーニングにボクシングを

西ドイツ週刊誌から

欧州各国ではハンドボール選手の体力づくりにいろいろ考えている。オフシーズンの体力づくりに、夏は水泳、冬はクロスカントリーがあり、かなり多くの国でやっている。ボクシングの練習場を利用しての変わった練習風景を紹介しよう。

これは基礎体力づくりを目的としたもので、特に力強さとスタミナの養成にかなり効果があるとされている。クラブのハンドボール選手たちは水曜日の午後、仕事が終わると職場からボクシング・クラブにくる。そこにはバーベルが待っている。それを使ってのいろいろな筋力の養成が行なわれる。バーベルを使ったり、あるいは2人1組になって腹筋、首すじの鍛練、バーベルを使っての腕、脚の筋肉の鍛練、やや軽いものを使っての長期の使用に耐える筋肉のスタミナの養成などが行なわれる。

なかでも特別なのはダンベル（亜鈴）を持ち、シャドウ・ボクシングをするという練習である。ダンベルを長期間使うことによって、筋肉の持久力をつける。さらにシャドウ・ボクシングによってハンドボール選手に最も必要とされる足の速い動きを身につけることができる。ハンドボール選手に不可欠のフットワーク、攻撃のさいにはフェイント動作に、防御のさいには相手の動きに対応して動けるというフットワークの練習に、このシャドウ・ボクシングがいちばん効果的であるということだ。

さらにゴールキーパーはサンドバッグを使用する。腕力、特に腕を伸ばし、ボールをたたき落とすだけの腕力を作ろうと努力している。このサンドバッグを使用してそれをたたき、その周囲をフットワークで回ることでゴールキーパに必要な二つの力、早いフットワークによる位置の変え方、強くそしてよく伸びる腕が作られる。

このように西ドイツではボクシングを練習に採用しているが、彼らは上達がきわめて早く、見ている人のなかから「もはやアマチュアではない」という声さえ聞かれるほど。ハンドボールの選手の練習にはいろいろなものが採用されている。それによってすばらしい選手を養成していくのが、最近の各国のコーチ陣が採用している練習法である。日本でもウエート・トレーニングはかなり採用しているようだが、このような他の競技による。体力の増強をもっと考えてもいいと思う。

ソ連などが代表

第3回女子7人制ハンドボール世界選手権大会の1～2回戦は欧州各地で行なわれたが、近着の国際広報によるとハンガリー、ポーランド、ソ連の3チームが西ドイツでの準々決勝の出場権を得た。これで前回優勝のルーマニア、地元開催国の西ドイツと計5チームが決まった。

▽1回戦

ノルウェー　7—6　スウェーデン
ノルウェー　8—7　スウェーデン

▽2回戦

ポーランド　10—5　ノルウェー
ノルウェー　7—4　ポーランド

この結果、ポーランドが準々決勝に進出。

ハンガリー　8—6　東ドイツ
東ドイツ　6—4　ハンガリー

予選でハンガリーが準々決勝に進出。

ソ連　19—6　オランダ
ソ連　15—4　オランダ

このこの結果、ソ連が準決勝に進出。

連載第17回

ハンドボール球史

——開催地（静岡・富山）が健闘——

城北勢が大活躍

郷土色豊かなマスゲームに色どられ、はなやかな開幕となった第12回大会は各種目に地元静岡の健闘が目だった。そのユニホームの色にちなんで『オレンジ旋風』といわれた。

ハンドボールも例外ではなく、もともとこの競技が盛んな清水市で開かれたことも手伝って連日好試合を展開した。

高校女子優勝、一般女子2位、高校男子3位という静岡の成果は特筆に価いしよう。高校女子決勝の静岡城北―半田戦は劇的な一戦だった。またこの年から女子が7人制に統一されたこと。初めて実業団チーム（三菱レイヨン・広島）が登場したことの2点も記憶されるべきであろう。全国大会に男子の実業団が登場したのはこれが初めてである。

ちなみに女子は昭和32年の全日本総合に愛知紡（愛知）が姿を見せている。第12回大会の参加人員は713人だった。

【第12回国体・昭和32年10月26日～30日・静岡県清水市】

▼高校男子1回戦

兵庫工（兵庫）6―5 済々黌（熊本）
清水商（静岡）12―8 鎌倉学園（神奈川）

▽同準々決勝

兵庫工 11―10 盛岡一（岩手）
桜台（愛知）17―10 函館工（北海道）
下関幡生工（山口）12―6 新居浜工（愛媛）
清水商 14―7 小松実業（石川）

▽同準決勝

桜台 11―10 兵庫工
下関幡生工 7―6 清水商

▽同3位決定戦

清水商 15―15 兵庫工
引き分け

▽同決勝

桜台 12（6―6、6―2）8 下関幡生工

桜台は3年連続、6回目の優勝、愛知代表の優勝も3年連続6回目。

▼高校女子1回戦

倉敷青陵（岡山）7―4 四日市（三重）
寝屋川（大阪）4―1 函館中部（北海道）
静岡城北（静岡）2―1 水海道二（茨城）
熊本市立（熊本）6―4 今治西（愛媛）
京都女（京都）3―2 熊谷女（埼玉）
明善（福岡）7―4 徳山（山口）
羽咋（石川）5―2 高知中芸（高知）
半田（愛知）10―4 涌谷（宮城）

▽同準々決勝

寝屋川 5―4 倉敷青陵
静岡城北 3―1 熊本市立
明善 8―5 京都女
半田 7―4 羽咋

▽同準決勝

静岡城北 4―2 寝屋川
半田 7―5 明善

▽同3位決定戦

寝屋川 5―4 明善

▽同決勝

静岡城北 8（2―3、3―2、……1―0、2―2）7 半田

静岡城北高は初優勝。静岡の優勝も初めて。

▼一般男子1回戦

浅陽ク（長野）14―9 青森ク（青森）
函館サンダーク（北海道）12―11 全茨城（茨城）
富山ク（富山）12―8 全静岡（静岡）

▽同2回戦

桜丘会（愛知）14―10 浅陽ク
京都パレス（京都）16―6 大宮高OB（埼玉）
済々黌OB（熊本）14―8 三菱レイヨン（広島）
大阪ク（大阪）12―5 函館サンダー・ク
東京ク（東京）18―4 高知ク（高知）
白亜ク（岩手）18―12 楠送会（兵庫）
福岡ク（福岡）6―5 足利球友会（栃木）
山口ク（山口）20―10 富山ク

▽同準々決勝

桜丘会 16―8 京都パレス
大阪ク 16―12 済々黌OB
東京ク 19―7 白亜ク
山口ク 23―11 福岡ク

▽同準決勝

大阪ク 13―12 桜丘会
東京ク 11―8 山口ク

▽同3位決定戦

山口ク 12―9 桜丘会

▽同決勝

大阪ク 10（3―5、7―4）9 東京ク

大阪クは4年ぶり5回目。大阪代表の優勝は4年ぶり6回目。

▼一般女子1回戦

全愛知ク（愛知）6―3 寝屋川ク（大阪）
日体大（東京）8―1 倉敷青陵OG（岡山）
全茨城（茨城）12―1 比美ク（富山）
城北ク（静岡）6―2 全宮城（宮城）

▽同準々決勝

全愛知ク 7―5 明善ク（福岡）
日体大 12―2 高知ク（高知）
全茨城 7―6 尼崎ク（兵庫）
城北ク 3―1 函館北星ク（北海道）

▽同準決勝

全愛知ク 8―2 日体大

城北ク 5−4 全茨城
▽同3位決定戦
全茨城 5−3 日体大
▽同決勝
全愛知ク 6（3−1 3−3）4 城北ク
全愛知クは初優勝。愛知代表の優勝は2年ぶり2回目。
▼天皇杯順位①愛知②静岡③大阪④山口⑤東京⑥茨城
▼皇后杯順位①愛知②静岡③茨城④大阪⑤東京⑥福岡

富山、全部門に入賞

前回に続き、第13回大会も地元（富山）の進出が大いに目だった。特に高校男子で氷見が強豪を連破して初優勝し、その他全部門は入賞という好成績だった。

開催県チームの台頭が国体の特色になったのは、静岡、富山大会以降といっても過言ではない。

またこの大会では全部門の勝者が初優勝という記録である。一般男子決勝芝浦ク−桜丘会は大型チームの対決で球趣満点、史上に残る好試合を展開した。一般女子で新進愛知紡を押えた大阪代表（寝屋川ク）の地力も目だち、高校準優勝の中京商はこの大会の活躍が全盛期へのプロローグとなるのである。なお参加人員は712人であった。

【第13回国体・昭和33年10月19日〜23日・富山県氷見市八尾町】

▼高校男子1回戦
熊本市立（熊本） 12−1 涌谷（宮城）
徳山（山口） 18−0 金沢市工（石川）
寝屋川（大阪） 11−7 新居浜西（愛媛）
明善（福岡） 17−8 倉敷青陵（岡山）
富山女（富山） 22−3 高岡（高知）
尼崎（兵庫） 14−4 函館中部（北海道）
水海道二（茨城） 10−5 沼津女商（静岡）
仙台二（宮城） 19−8 済々黌（熊本）
日川（山梨） 8−7 新居浜工（愛媛）
▽同準々決勝
明石（兵庫） 12−11 仙台二
氷見（富山） 12−4 盈進商（広島）
上田（長野） 8−5 函館中部（北海道）
中京商（愛知） 12−9 日川
▽同準決勝
氷見 14−7 明石
中京商 16−6 上田
▽同3位決定戦
明石 9−8 上田
▽同決勝
氷見 11（2−4 5−3 … 3−1 1−0）8 中京商
氷見高は初優勝。富山代表の優勝も初めて。

▼高校女子1回戦
半田（愛知） 12−5 熊谷商工（埼玉）
▽同準々決勝
水海道二 5−3 尼崎
富山女 9−8 明善
徳山 4−2 寝屋川
熊本市立 12−6 半田
▽同準決勝
水海道二 7−4 富山女
熊本市立 4−2 徳山
▽同3位決定戦
徳山 5−0 富山女
▽同決勝
水海道二 5（2−3 2−1 … 0−0 1−0）4 熊本市立
水海道二は初優勝。茨城代表の優勝も初めて。

▼一般男子1回戦
全兵庫（兵庫） 14−11 全神奈川（神奈川）
函館サンダー・ク（北海道） 11−6 福岡ク（福岡）
京都ク（京都） 13−11 全宮城（宮城）
▽同2回戦
全兵庫 11−6 山口ク（山口）
富山ク（富山） 13−10 高知ク（高知）
清水商ク（静岡） 18−9 白亜ク（岩手）
芝浦ク（東京） 10−7 函館サンダー・ク
住友化学（愛媛） 9−8 岡山球友ク（岡山）
大阪ク（大阪） 19−6 高嶺ク（山梨）
全茨城（茨城） 12−11 浅陽ク（長野）
桜丘会（愛知） 21−14 京都ク
▽同準々決勝
富山ク 12−11 全兵庫
芝浦ク 17−12 清水商ク
大阪ク 14−10 住友化学
桜丘会 28−8 全茨城
▽同準決勝
芝浦ク 15−6 富山ク
桜丘会 17−5 大阪ク
▽同3位決定戦
大阪ク 16−12 富山ク
▽同決勝
芝浦ク 17（5−2 4−7 … 0−2 4−2 … 3−1 1−2）16 桜丘会
芝浦クは初優勝。東京代表の優勝は4年ぶり3回目。

▼一般女子1回戦
明善ク（福岡） 7−4 尼崎ク（兵庫）
梨窓ク（山梨） 5−1 倉敷青陵OG（岡山）
函館フレップ（北海道） 2−1 高知ク（高知）
涌谷高OG（宮城） 10−6 石川ク（石川）
▽同準々決勝
愛知紡（愛知） 8−6 明善ク
氷見ク（富山） 4−3 梨窓ク
全茨城（茨城） 5−3 函館フレップ
寝屋川ク（大阪） 10−1 涌谷高OG
▽同準決勝
愛知紡 14−3 氷見ク
寝屋川ク 14−1 全茨城
▽同3位決定戦
全茨城 5−2 氷見ク
▽同決勝
寝屋川ク 5（4−1 1−3）4 愛知紡
寝屋川クは初優勝。大阪代表の優勝は4年ぶり6回目。
▼天皇杯順位①大阪②茨城③富山④東京⑤愛知⑥熊本
▼皇后杯順位①茨城②大阪③愛知④熊本⑤山口⑥富山

天皇・皇后杯年次首位県

	（天皇杯）	（皇后杯）
第3回	大阪	大阪
4	〃	岡山
5	〃	岡山・大阪
6	岡山	岡山
7	愛知	愛知
8	大阪・北海道	北海道
9	大阪	大阪
10	愛知	福岡
11	〃	〃
12	〃	愛知
13	大阪	茨城

※両杯制定は第3回から

東京都協会告知板

常務理事、理事合同会議議事録

▽とき　9月20日午後6時

▽ところ　大崎電気工業

▽出席者　渡辺、外山、古賀(代理)、荒川、松田、岡前、国原、岡村、今野、黒川、安藤、中沢

「報告事項」

（1）第20回国体の代表に東京都協会加盟チームから千代田印刷機製造（一般男子）、桜友会（教員）が選ばれた。

（2）10月チェコスロバキアで開かれる女子7人制世界選手権大会の日本代表は、近く日本協会から発表される。

（3）昭和41年度の国際試合として、4月にチェコスロバキア・チーム（男女）、9月に中国チーム（男子）の招待、また5月にソ連、ルーマニア遠征、42年（1967年）1月にスウェーデンで開かれる第6回男子7人制世界選手権大会（日本は無条件出場）に参加することが、日本協会の案として提出された。東京都協会は大いに協力していきたいと思う。

（4）世界選手権大会に出場する日本代表チームは10月日20夜出発する。

「協議事項」

（1）第3回東京都選手権大会開催については別項のように決めた。

（2）大会要員として荒川常任理事にたいして、「学連の理事長の立ち場で12人の要員を確保するよう」要望した。と同時に12月の全日本総合室内選手権大会の大会要員30人も合わせて要望し、荒川常任理事はこれを了承した。

（3）優秀選手選考委員に外山理事長、荒川、安藤、中沢各常任理事、近藤理事を選出。男女ともベスト7を選ぶ。

（4）12月の全日本総合室内選手権大会については次回の10月11日（月）の常任理事会、また11月8日（月）に常任理事、理事合同会議で協議する。

（5）全日本総合室内選手権大会の開催要項を至急日本協会に照会し、準備を進める。

第3回東京都選手権大会開催要項

▽期日　11月18日(木)から21日(日)まで

▽場所　東京体育館

▽種目　一般男子（教員、大学を含む）、一般女子（大学を含む）、高校男子、高校女子。

▽資格　都協会および日本協会登録チーム。

▽人員　1チーム監督1、選手15人以内(監督が出場するときは、選手の中に登録すること)

▽申し込み　11月6日（土）までに申し込み書二通を東京都協会に申し込むこと。

▽参加料　1チーム1500円、申し込みと同時に納入。（高校は別に決める）

▽組み合わせ　11月8日（月）午後6時から常任理事会を開いて責任抽選し、各チームに通知する。

▽代表者会議　11月17日（水）午後4時から大崎電気工業株式会社で行なう。

▽表状　優勝杯、賞状を贈る。

▽その他　①中学男女はオープン試合とし、記念品を贈る。②高校男女は準決勝から東京体育館で行なう。③電話の申し込みは受け付けない。④申し込み後のメンバー変更は認めない。⑤所定様式以外の用紙を使用したときも受け付けない。

◇第20回国体東京都予選（8月15月、駒沢第二）

▽一般男子1回戦

千代田印刷機　24（8－1, 16－1）2　城南ク

芝浦ク　26（13－5, 13－4）9　若木ク

▽決勝

千代田印刷機　31（12－8, 19－6）14　芝浦ク

得	芝浦		千代田	得
0	間	GK	永富	0
0	小林	GK	鈴木	0
0	野村	FP	青木	10
1	近藤	FP	木田繁	2
2	森谷	FP	吉川	3
3	福島	FP	木田雅	3
2	金山	FP	佐久間	10
4	住広	FP	安藤	3
1	中村	FP	宮下	0
1	村上	FP	佐藤	0
0	中上	FP	村田	0

31（1）7MT（2）14

注—一般女子はなし。

◇第13回早慶定期戦（9月11日、早大記念会堂）

慶　大　19（12－5, 7－6）11　早　大

早大の7勝6敗

得	慶大		早大	得
0	松本	GK	綿貫	0
0	北崎	GK	尾形	0
4	小林	FP	三沢	3
2	花野	FP	森永	2
3	石橋	FP	石田	0
0	安達	FP	水口	0
4	田中	FP	伊藤	4
6	小椋	FP	籏野	1
0	古村	FP	小島	0
0	米田	FP	森田	1
0	梶井	FP	茨原	0

11（1）7MT（3）19

福本君・青木嬢と結婚

三年越しのロマンスが実を結び、大崎電気GKの福本弘選手(26歳)、元愛知紡の青木悠子選手(24歳、現埼玉県庁体育課勤務）の結婚式が大崎電気工業株式会社社長渡辺和美夫妻の媒酌で9月23日、東京新宿の東京会館で行なわれた。

新郎はモーニング姿、新婦は真っ白いウェディング・ドレス。出席者は恩師三浦元秀氏（芝浦工大教授、ハンドボール部長)、高嶋洌氏（芝浦工大教授)、栗原埼玉県体育課長、吉野トヨ子さん（元オリンピック円盤投げ選手＝埼玉県体育課勤務）をはじめ大崎電気の先輩、ハンドボール部の同僚、元愛知紡の選手など約70人。渡辺社長の命令で新郎の福本君が〝花笠音頭〟を歌い、なごやかな披露宴だった。

◇　◇　◇

鳥取県協会住所変更

▽鳥取県ハンドボール協会

境港市上道町821

県立境高校内

TEL境港2342

地方だより

7月に沖縄協会設立

沖縄ハンドボール協会結成準備委員会は7月16日那覇高校で総会を開き、正式に「沖縄ハンドボール協会」を設立した。協会規約案を全員一致で承認したあと、新役員を次のように決めた。

▽会　長　仲田豊順（沖縄高体連会長）
▽副会長　新垣守（ゲンキ乳業社長）金城茂（辺土名高校長）
▽理事長　平仲孝栄（糸満高教諭）
▽顧　問　小橋川寛（琉球大学教育学部長）
▽理　事　玉井修（ゲンキ乳業）新垣守信（信用商会）屋良朝晴（保健体育課）志村峅市（沖縄工高教諭）比嘉敏雄（保健体育課）若杉和宏（琉球新報）福治友剛（沖縄タイムス）神山ミエ子（光陽水産）安次富善弘（興南高教諭）宮城勇（琉大助教授）安里嗣則、比嘉良亟（沖縄工高教諭）町田文子（那覇高教諭）外間政太郎（琉大助教授）森東弘（那覇高教諭）
▽監　事　森田孟順（興南高教諭）平良肇（知念高教諭）

沖縄で高校選手権

◇第1回全沖縄高校選手権大会は6月27日から29日まで那覇高校で行なわれた。男子は興南、女子は知念が優勝した。

「男子」
▽1回戦
沖縄工　23―7　糸満
那覇商　18―15　那覇
興　南　22―10　コザ
▽準決勝
興　南　22―20　那覇商
沖縄工　21―9　知念
▽決勝
興　南　26（11―6、15―5）11　沖縄工

「女子」
▽1回戦
那　覇　12―9　普天間
知　念　7―2　読谷
那覇商　7―6　コザ
▽準決勝
知　念　7―2　那覇
那覇商　14―2　糸満
▽決勝
知　念　6（3―1、3―3）4　那覇商

◇第14回長野県総合体育大会兼第20回国体県予選（8月29日、上田市）
▽一般男子準決勝
鳩ケ丘ク　22―17　上田ク
▽同決勝
北農ク　17―13　鳩ケ丘ク
▽高校男子準決勝
上　田　21―13　板城
屋　代　13―9　北佐久農
▽同決勝
上　田　18―7　屋代

◇第14回近畿中学大会（8月25―26日、大津市）
▽男子予選リーグ
衣川（兵庫）　20―5　守山（滋賀）
三郷（奈良）　16―9　彦根南（滋賀）
神戸（兵庫）　15―5　長浜南（滋賀）
大淀（大阪）　31―0　長浜南（滋賀）
東生野（大阪）　13―8　守山（滋賀）
洛星（京都）　39―3　彦根南（滋賀）
▽準決勝
生駒（奈良）　12―9　東生野（大阪）
洛星（京都）　9―8　大淀（大阪）
▽決勝
洛星（京都）　12（8―3、4―6）9　生駒（奈良）
▽女子予選リーグ
長浜西（滋賀）　5―4　皆山（京都）
秦荘（滋賀）　17―8　衣川（兵庫）
秦荘（滋賀）　13―0　城東五（大阪）
生駒（奈良）　11―1　長浜西（滋賀）
▽準決勝
豊中二（大阪）　7―5　生駒（奈良）
秦荘（滋賀）　8―7　東生野（大阪）
▽決勝
秦荘（滋賀）　11（4―1、7―2）3　豊中二（大阪）

◇第20回国体京都府高校予選（8月27日―29日、洛星高）
▽男子一回戦
桃　山　18―10　塔南
洛　東　40―7　立命
大　谷　17―13　鴨沂
洛　星　16―8　乙訓
西京商　16―15　平安
伏見三　26―6　嵯峨野
▽準々決勝
桃　山　17―10　日吉丘
洛　星　11―9　洛東
西京商　20―20　大谷
（抽選勝ち）
▽準決勝
洛　星　27（15―6、12―7）13　桃山
伏見工　29（16―3、13―3）6　西京商
▽決勝
伏見工　15（9―6、6―8）14　洛星
▽女子準々決勝
明徳商　18―4　洛東
精　華　18―7　塔南
京都女　9―8　華頂
乙　訓　8―4　西京商
▽準決勝
京都女　4（1―1、3―2）3　明徳商
精　華　16（7―1、9―2）3　乙訓
▽決勝
京都女　8（3―3、5―1）4　精華

集記　編後

○…夏の全日本総合選手権大会で大崎電気が昨年に次いで二度目の男女優勝なるかーに興味があった。女子はタイムアップ5秒前に大洋の西村に決勝点を許してこの望みは一瞬にして消えた。それは別としてこの一戦は近来にない好勝負として長く球史に残ろう。男子は芝浦工大の選手全員が集団下痢というアクシデントにぶつかり、気の毒な試合だった。ことしの全日本総合室内でぜひ優勝してこの汚名をばん回してほしい。

○…協会の境井常務理事が「海外ジャーナル」を担当してくれているので、内容が非常に充実してきた。それと藤本理事も西ドイツ球界のニュースを提供してくれる。いままで日本国内しか目にはいらなかったが、海外の状況がわかるのは大いに参考になると思う。8月号は新たにソ連のニュースを取り入れた。来年のソ連遠征に備えて企画したもの。できるだけ目を世界に向けたい。

○…沖縄に協会が設立され、そして第1回沖縄高校選手権大会を開いた。また高嶋理事長の話によると、近く佐賀、徳島の両県に協会設立の見通しがついたとか。これが実現すれば全国の都道府県に組織を持つことになる。一日も早くそうなってもらいたい。（ふぐ）

もてるポロシャツ
もちたいポロシャツ
レナウンポロシャツ
ボンネル
RENOWN
レナウン
レナウン工業株式会社
レナウン商事株式会社
東京・大阪・札幌・仙台・名古屋・広島・福岡

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第二十六号
昭和四十年六月 第三種郵便物認可
昭和四十年九月二十日印刷
昭和四十年九月二十五日発行
発行所 日本ハンドボール協会
渋谷区神南町二五
代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 高嶋冽
定価百三十円
(〒)二十円